大阪府埋蔵文化財調査報告２００２－１

余部遺跡 Ⅱ

－河内鋳物師関連集落の調査－

2003年3月

大阪府教育委員会

余部遺跡 Ⅱ

－河内鋳物師関連集落の調査－

2003年3月

大阪府教育委員会

はしがき

余部遺跡周辺には、中世に高い鋳造技術でその名を誇った集団、河内鋳物師が活躍していたことが、文献史料や金石文などから知られています。遺跡の南側は近畿自動車道松原すさみ線や松原泉大津線建設に伴う調査で中世の鋳造に関する遺構・遺物が大量に発見されており、それまで記録にしかなかった河内鋳物師の活動がはじめて考古学的に実証されるようになったのです。

大阪府教育委員会では、美原町北余部の府営美原北余部住宅建て替え工事（第1・2期）に伴って、継続的に発掘調査を実施しています。これまでの調査では、鎌倉時代を中心とした中世の鋳造遺構や遺物が発見され、堀に囲まれた屋敷跡群が発見されました。調査地周辺は日置荘という地名が残り、興福寺荘園として土地区画されていたことが知られます。屋敷跡群は荘園に関する有力者の居住域で、荘園管理と共に鋳物師集団を統括していたものと結論づけられました。

今回の発掘調査でも、中世の集落と鋳造関連遺構が見つかりました。今回発見された遺構は建物群と鋳造関連遺構、そして、それをとり囲む東西65m、南北30～45m規模の方形区画が中心です。しかし、今回発見された方形区画と建物群は、規模や出土遺物などから、以前に見つかっていた有力者の屋敷跡とは性格を異にするもののようです。方形区画の内部には小規模な建物群が密集し、鋳造関連遺物がいたるところに廃棄されていたことより、鋳物師集団の作業場と居住地を兼ね備えた施設だったと考えられます。

しかも、大量の瓦器椀や土師器皿などの日常生活食器とともに鉄素材や銅銭、青銅製品なども発見されました。今回の調査成果からは鋳物生産を取り巻く人々を中心に交易・運搬・行商など様々な活動の場が展開していたことが予測され、文献史料に登場する遍歴の工人集団を復元することも可能で、興味深い調査資料となりました。

最後に、現地調査と本書の作成に関し、地元自治会、美原町教育委員会、大阪府建築都市部住宅整備課はじめ、関係各位からご協力・ご助言を賜りました。記して、深く感謝の意を表すると共に、今後とも文化財保護行政へのご理解・ご協力を賜りますようお願い申し上げます。

平成15年3月

大阪府教育委員会
文化財保護課長　小林　栄

例　　言

1. 本書は府営美原北余部住宅建て替え事業に伴う余部遺跡発掘調査報告書である。調査は本府建築都市部から依頼を受け、本府教育委員会が実施した。

2. 現地調査は文化財保護課調査第二グループ技師、西川寿勝を担当者として、平成13年８月に開始し、平成14年３月末に終了した。平成14年１月には現地説明会を実施し、普及と活用に努めた。整理作業は調査管理グループ山田隆一・小浜成を担当者として、平成14年４月から翌年３月末まで行った。

3. 本書の執筆・編集は西川が中心に行い、一部は渡辺晴香（本府調査員）による。また、出土青銅製品の成分分析成果について内田俊秀氏・嵜田真友子氏（京都造形芸術大学芸術学部文化財保存研究室）より玉稿を賜った。

4. 本文・挿図に用いた標高は東京湾標準潮位（T．P．値）を、座標値は国土座標第Ⅵ系によるもので、方位は座標北を示す。

5. 航空写真測量は（株）サンヨーに委託して行った。撮影フィルムは同社において保管されている。また、遺物の写真撮影は（有）阿南写真工房に委託して実施した。

6. 発掘調査・遺物整理及び本書作成に要した経費は全額大阪府建築都市部が負担した。報告書は300部作成し、一部あたりの印刷単価は２１００円である。

7. 現地調査、報告書作成にあたって、以下の方々、機関からご指導、ご助言、ご協力を得ました。記して感謝致します（五十音順　敬称略）。

青木成美　赤松和佳　泉谷博幸　五十川伸矢　今井典子　上田富雄　内田俊秀　小野精一　川口宏海　河野一隆　神崎　勝　北野昭三　久保智康　黒田慶一　坂口浩司　佐久間貴士　嵜田真友子　杉山　洋　鈴木重治　武部恵子　西田ただみち　西田孝司　肥田勝秀　藤戸誠司　庖丁道明　光田榮宏　村木二郎　鋳鏡研究会　鋳造遺跡研究会　美原町教育委員会

目　　次

はしがき　例言

第Ⅰ章　位置と環境　1．周辺環境……（西川）1
2．河内鋳物師略史……（西川）3
3．調査経緯……（西川）5
4．調査区の設定……（西川）5
5．基本層序……（西川）6

第Ⅱ章　発掘調査　1．中世以前の遺構と遺物……（西川）10
2．中世の遺構と遺物……（西川・渡辺）16
3．その他の遺構と遺物……（西川・渡辺）49

第Ⅲ章　まとめと展望　1．中世以前の遺構と遺物……（西川・渡辺）51
2．中世の遺構と遺物……（西川・渡辺）51
3．河内鋳物師集落の実態と調査の展望……（西川・渡辺）53

付載　余部遺跡出土青銅製品の蛍光X線分析成果について……（内田・甚田）55

実測遺物登録対照表・抄録……（渡辺）60

図 版 目 次

図版表紙　井戸3－1出土青磁小皿
図版1　1号棟区遺構
図版2　2号棟区遺構
図版3　3号棟区遺構
図版4　中世以前の土器・石器・瓦磚類
図版5　土坑2－4・井戸3－2・落ち込み東設－2出土土器
図版6　井戸3－1出土土器
図版7　青銅製品・鉄製品・石製品・鋳型

挿図目次

図1　周辺遺跡分布図……2
図2　遺跡位置図……2
図3　土層柱状図……7
図4　遺構全体図（1）……8
図5　遺構全体図（2）……9
図6　打製石器……10
図7　不定形土坑群……11
図8　畝溝遺構……13
図9　中世以前の土器・瓦磚類……15
図10　方形区画復元図……17
図11　1号棟区中世遺構図……19
図12　井戸1－1・南北溝1－1……20
図13　2号棟区中世遺構図……22
図14　掘立柱建物2－1……23
図15　掘立柱建物2－2……24
図16　南北溝2－5出土土器……25
図17　南北溝2－8出土土器……25
図18　土坑2－4出土土器（1）……26
図19　土坑2－4出土土器（2）……27
図20　南北溝2－7出土土器……27
図21　大土坑2－1出土土器……28
図22　井戸2－1出土土器……28
図23　井戸2－1～4……29
図24　3号棟区中世遺構図……31
図25　井戸3－1・3－2……32
図26　井戸3－2出土土器……33
図27　井戸3－1出土土器……34
図28　南北溝3－1他出土土器（1）……35
図29　南北溝3－1他出土土器（2）……36
図30　掘立柱建物3－1……37
図31　4区中世遺構図……40
図32　東設備棟区……41
図33　落ち込み東設－2出土土器……41
図34　白磁と青磁……42
図35　常滑焼大甕……43
図36　中世の瓦……44
図37　青銅製品・鉄製品・石製品・鋳型……45
図38　フイゴ羽口……46
図39　北道路区のわだち跡……49
図40　井戸2－3出土陶磁器……50
図41　立会調査位置図……50

表　今回調査区発見遺構……6

写真　瓦器外面に残る凸線による（擬み篦）痕跡……48

第Ⅰ章　位置と環境

1．周辺環境

本遺跡は大阪府南河内郡美原町北余部地内の中位段丘上に所在する（図1）。余部遺跡は南北約1㎞、東西約0.3㎞の範囲に及び、西側は日置荘遺跡、東側は西除川をはさんで太井遺跡に近接する。西に接する日置荘遺跡は行政区分上、堺市域にあたる。本来、余部遺跡・日置荘遺跡は同じ性格の中世集落であり、一連のものと考える。一方、余部遺跡の南端では飛鳥時代の集落が発見されており、中世集落は及ばない。また、南側の中世集落では河内鋳物師に関連する鋳造関連遺構が発見されておらず、その性格はやや異なるかもしれない。

太井遺跡は中世集落の一端が発見されているものの、やはり鋳造工房が見つかっておらず、遺跡の性格は異なる。そして、古墳時代後期から奈良時代にかけての住居跡などが展開、北側に全長115mの大型前方後円墳である黒姫山古墳を中心とした古墳群を形成する。また、奈良時代集落の一角からルツボ炉を主体とした鋳造遺構が検出されており、注目される。太井遺跡の東北に接して真福寺遺跡が調査されている。ここでは中世集落と鋳造関連遺構が良好に残されており、河内鋳物師集落の代表とされている。

今回調査区は余部遺跡の北端に位置する。その北には条里制区画に添った方形の前が池があり遺構はとぎれるようだ。ただし、この池がいつごろ営まれたものかは判然とせず、中世の遺構が削平されている可能性もある。調査区から北に約500mの地点には大饗城（城岸寺城）土塁跡など、中世後期城館の痕跡が残されている。大饗城の一部は発掘調査され、14世紀代の礎石立ち建物と石組み溝、石敷き遺構、焼けた壁土などが発見されている。また、大饗城は南朝方の作戦行動に利用されていたことが文献に残されている（『和田助氏軍忠状』1352年）。

そして、調査区の南東約250mの余部遺跡内では一辺100m程の方形素掘り溝と土塁で囲まれた余部城が発掘調査によって確認されている。調査の結果、13世紀中頃から15世紀頃まで機能していた城館であることが確かめられた。

以上、余部遺跡周辺の歴史的環境と発掘調査成果については『美原町史』1巻　1999年刊行はじめ、大阪府教育委員会刊行の以下の報告書に詳しく、重複を避けたい。

大阪府教育委員会　『余部遺跡（その1）発掘調査概要』Ⅰ　1998
『余部遺跡（その2）発掘調査概要』Ⅰ　1998
『余部遺跡（その1）発掘調査概要』Ⅱ　1999
『余部遺跡（その2）発掘調査概要』Ⅱ　1999
『余部遺跡（その1）』　2000　『余部遺跡』Ⅰ　2002

大阪府文化財調査研究センター　『余部遺跡』　1997

鋳造遺跡研究会　『鋳造遺跡研究資料2001－河内鋳物師の謎にせまる－』　2001

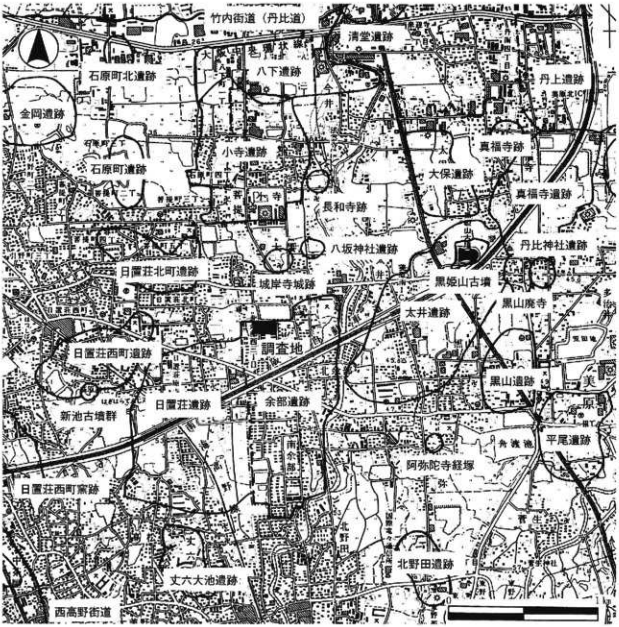
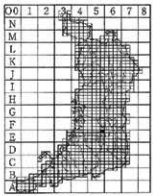
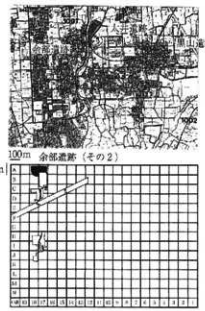


図１　周辺遺跡分布図（１／25000）





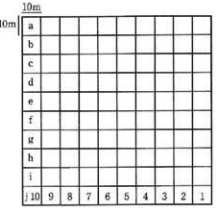


図２　遺跡位置図

2．河内鋳物師略史（大仏の鋳造者を中心に）

金属製品はたたき鍛えて形をつくる鍛造技法と、溶かして型に流し込み造形する鋳造技法に大別出来る。前者には刀・包丁・斧などが、後者には車のエンジン・ゴルフクラブ・イヤリングなどがあり、特性に応じてつくり分けられている。これらの金属加工は弥生時代に大陸から渡来した。特に、銅鐸・銅剣・ヤジリなどの鋳造技術は弥生時代中期に国産化がはじまり、後期から古墳時代には全国に普及した。そして、奈良時代には奈良県東大寺の大仏を完成させるにまでいたる。

ところが、平安時代の終わり、源平の争乱で南都が焼き打ちされ、大仏が破壊された時（西暦1180年）、それを再びよみがえらせる技術はすでに失われていた。同様の技術喪失は現在にも通じる。弥生時代には高さ１ｍ近くもの大型銅鐸を厚さ４～５㎜におさめて鋳造する技術水準に達する。しかし、同じ技術を現在に再現することはできていない。また三角縁神獣鏡が同じ笵の鋳型だったのか、同じ紋様の鋳型を複数つくっていたのかについても現在の技術では復元できていない。…兄、私たちは飛躍的な技術革新の時代に育ったように感じられる。ところが、その多くは大量生産・簡便・安価を追求する技術に執着し、捨て去ったものも数多くあるのである。

さて、南都焼き打ちで破壊された東大寺大仏の修復に尽力した僧、重源は大仏再鋳のために中国から鋳物師を呼んだ。先に示したとおり、鎌倉時代には奈良時代の大仏鋳造技術がすでに失われていたからだった。ただし、渡来したのは技術指導者だけのようで、実際の作業には南河内で鍋や釜を鋳造していた鋳物工人、河内鋳物師を参加させた。

この工人集団は現在の美原町を中心に堺市東部から松原市南部にかけて散在していた技術集団だったと考えられている。なかには朝廷に灯籠などを寄進して鋳物の専売権や諸国往来の許可書を手に入れ、広く生産活動をした一派もいた。そして、大仏再鋳を成功させた一派は後に「東大寺鋳物師」と呼ばれ、大型製品を鋳造する技術を習得しただけなく、公事などの減免や製品を売る際に関所を通過出来る権限も獲得した。

各派が知られる河内鋳物師は全国の寺院に伝わる梵鐘の製作銘によって足取りをたどることができる。例えば、現存する鎌倉時代の梵鐘の大半は河内鋳物師関係を示す銘文が刻まれている。平安時代後期に流行した末法思想は、鎌倉時代の新たな仏教へと移行し、寺院建設ラッシュとなる。河内鋳物師は梵鐘だけではなく、仏具から生活用具にいたるまで金属製品の多様な需要に対応していたことと思われる。

しかし、南北朝・室町時代にいたる社会の混迷や政権の弱体化は河内鋳物師の躍進と流通網に陰りをもたらした。「出吹き」と呼ばれる方法で需要のあるところまで出張する鋳物師や、「隠れ鋳物師」と呼ばれる、各地に移住・分散した鋳物師の存在から工人集団の統率が薄れ、技術が地方に拡散したことが予想できる。

加えて、燃料の供給地としていた南河内の山麓を拠点に、楠木正成らが戦乱を巻き起こしたことは、河内鋳物師の生産活動に大きな影響を与えたと思われる。河内鋳物師の一派は堺市土師や

大阪市阿倍野・我孫子などに移住し、荷運びや鍛冶などに従事したと伝えられている。

没落した河内鋳物師は戦国時代になって再び脚光があたる。鉄砲生産など兵器の需要を満たすため、堺の豪商を背景に再編の声がかかったのである。ただし、戦国乱世の特需は長続きせず、江戸幕府の成立以降は兵器需要が減ってしまう。鋳物師の中には堺に移って包丁や鋏など「堺刃物」の特産品を生産する集団へ変貌した者もいるようだ。

江戸時代、真継久直は河内鋳物師の由緒書をまとめ、これをもとに朝廷に取り入って全国の鋳物師を統率しようとした。この「真継家文書」は年号などの改変があり、偽文書として近年まで等閑視されていた。ところが、河内鋳物師の実態を記した新たな紙背文書が発見されたことや「真継家文書」の細かい分析から信憑性の高い部分が評価されるようになった。

そして現在、美原町大保を拠点に河内鋳物師とわが国の鋳造業発祥を顕彰して「河内鋳物師顕彰会」が活動している。記念碑の設立はじめ、史料調査・保存・普及事業などの取り組みが評価される。

近年、鎌倉市域遺跡群の世界遺産登録計画に先立って、鎌倉大仏（国宝阿弥陀如来像）周辺（高徳院境内）が部分的に調査された。鎌倉大仏は高さ約11m、重量約122ｔを誇るわが国二番目の巨大鋳造物として知られる。鎌倉では国宝建長寺梵鐘や国宝円覚寺梵鐘など、河内鋳物師一派の物部氏による数々の大型鋳造製品が残されており、鎌倉大仏も河内鋳物師一派の作と考えられている。

鎌倉大仏は当初（1238年頃）、木造だったことが『吾妻鏡』などによって知られる。鋳造大仏の造営開始は北条時頼が執権だった1250年頃とされるが詳しくはわかっていない。また、室町時代初頭には大仏殿がなかったことや、明応七年（1498）の大地震の時には津波で海水が大仏殿まで打ち寄せたことが記されている。

このように不明部分が多い大仏鋳造の一端が発掘調査によって解明されたのである。注目されることとして、大仏殿基壇に残された大仏を中心にした巨大なお椀状の盛り土痕跡がある。大仏は梵鐘鋳造と同様、鋳型を上下何段かに分けて積み上げられたらしい。調査担当者は完成した段ごとに鋳型をはずして鋳造が行われたと考えるが、発見された鋳型片は小さく、鋳損じた部分のみ鋳型をはがしたのかもしれない。

その他、銅カス・フイゴ羽口・溶解炉炉壁片などが発見されている。溶解炉で溶かした青銅を鋳型に流し込むには、鋳型の上部より高い位置に溶解炉の注ぎ口を設定しなくてはならず、その構造は不明瞭である。しかし、これらに伴って発見された陶磁器などは鎌倉時代前半のもので大仏鋳造の時期を裏付けることができた、という。

ところで、鎌倉大仏はその後何回も改変されていたようで、江戸時代には大仏表面を大規模に覆う補修もあった。現在の外観が鎌倉時代の容姿をとどめるものなのか更なる調査が必要であることが確認されている。

3．調査経緯

余部遺跡の発掘調査は府営美原北住宅建て替えに伴い継続して実施されてきた。戦後すぐにはじまった大阪府の住宅供給による低層スレート葺きの住宅群を解体し、11階建て高層建築物を建設する事業である。調査は平成７年度に大阪府文化財調査研究センターに委託して行われ、平成９・10年度は本府教育委員会で調査している（第１・２次調査）。今回は第３次調査で、住宅建て替え事業の最終計画地にあたるもっとも北側の敷地に位置する。10年以上に及ぶこの事業によって約49000㎡が調査された。

センター委託調査と第１・２次調査では建て替える高層建築物の位置や設備棟などの付帯施設の配置が確定していない段階に行われたため、開発地域全面を調査した。今回は高層建物とそれに取りつく付帯施設や埋管位置が確定していること、開発深度と遺構面の深度を調整できたことにより、破壊による記録保存が必要な最低限の部分、約3300㎡に関して本調査を実施することとなった。加えて、既存の道路を拡張整備する外周道路部分については拡張部分を本調査し、擁壁設置工事と埋管などの切り替え工事について、立会調査を同時期に実施した。これらの調査成果についても本編でまとめて報告する（P50）。

4．調査区の設定

余部遺跡での第１～３次調査は統一した地区設定で発掘調査を行うことができている。センター委託調査の調査区についても上記調査区への対応が可能である。ただし、第１～３次調査では最少単位として10m方眼の範囲で発見遺構・遺物を整理・取りあげたのに対し、センター委託調査ではさらに４m方眼の範囲をもって、発見遺構・遺物の整理・取りあげを行っている。

大阪府教育委員会の実施している発掘調査は国土座標第Ⅵ系に基づき、大小４段階に分けて区画設定する（図２）。第１区画は１／10000地形図を南北6000m・東西8000m単位で区画する。本調査区のある美原町西部はＥ５地区にあたる。第２区画は１／2500地形図を用い、第１区画を16分割して、南北1500m・東西2000m単位で区画する。本調査区のある余部遺跡は東北隅にあたる16地区にあたる。第３区画は第２区画を300分割し、南北100m・東西100m単位で区画する。本調査区の大半はＡ17・Ａ18地区に位置する。第４区画は第３区画を100分割し、南北10m・東西10m単位方眼で区画する。今回調査区はＡ17地区の南北ｄ～ｉ区の東西１～10区と、Ａ18地区のｆ～ｊ区で１～８区内に位置する。余部遺跡ではこの区画を最終単位として、遺構・遺物の帰属を明確化しているが、第４区画をさらに５m単位に４区分して調査する場合もある。

したがって、今回調査区の遺構・遺物の発見地点はＥ５－１６－Ａ17－ｄ１、Ｅ５－１６－Ａ18－ｆ１などと表記することができる。ただし、調査区は不定形に長い道路部分と幅３mで延長700mに及ぶ長大な埋管部分など、方眼区分では地区が煩雑になって調査しにくい部分もあった。これらは最小区画を設定しなかった。また、調査区が８か所に分断することから、調査区名と遺構番号にはそれぞれの開発目的を冠して、１・２・３号棟区、４区、東・西設備棟区、東・西・

北道路区をつけた。本報告はこれらの調査区単位に報告する。例えば、3号棟区で発見された井戸は井戸3－1などと呼称した。以下に発見遺構を列挙する。

	大土坑	土坑	鋳造土坑	井戸	柱穴	東西溝	南北溝	轍跡	建物	その他
1号棟区	3	50	－	1	155	13	6	－	－	－
2号棟区	1	5	－	4	239	9	15	－	2	－
3号棟区	4	117	2	3	304	12	22	○	1	畝溝群
4区(拡張区)	1	5	－	－	20	9	4	－	－	焼土坑
東設備棟区	－	－	－	－	27	1	1	－	－	落込み
西設備棟区	－	3	－	－	－	4	1	－	－	－
東道路区	－	2	－	－	4	6	3	○	－	－
北道路区	－	4	－	－	8	9	2	○	－	斜行溝
西道路区	－	2	－	－	5	8	3	－	－	－
立会調査	－	－	－	－	4	－	1	－	－	－

表　今回調査区発見遺構

5．基本層序

基本層序は第1・2次調査にほぼ対応する。ただし、地形は南から北に低くなっており、府営住宅建設時の盛土（淡黄土・砂利やガラ混）が1m前後となっている。その下に黒褐色系の腐葉土（黒褐土・暗緑灰土）による旧水田面がある。水田面上面の耕作土は府営住宅の造成時に攪乱を受けており、5～15cm程度の層厚を測る。その下に水田床土（灰白土）がある。これが遺構上面の遺物包含層に対応する。ところによっては灰白土の下にもう一つ水田床土（黒褐粘土）が広がる部分もある。3号棟区の中央部分ではこの灰白土下に3～5cm程度の灰褐粘土（オリーブ灰色粘土）層が薄く堆積しており、自然堆積層の広がりが確認できる。この堆積土の下から畝溝群が発見された。その下は地山で、1・2号棟区東半分と3棟区西半分は黄褐土によっており、ほとんど砂利を含まない。地山表面には茶褐色のマンガン粒が密に沈着する。しかし、その他の地域は黄褐土に礫や砂利が混じり、特に東設備棟区と北道路区は礫が多かった。遺構は礫の少ない黄褐土の発達したところに密集する傾向があり、地山の形状からも本調査区が中世集落の北の端に位置することがわかる。遺物包含層の厚みや柱穴の深度などから中世地表面は近世～近代までの耕作による削平をあまり受けていないと考える（図3）。

地山を深く掘削した井戸を断ち割った際、遺構面下約1.5mで青灰白礫層を確認した。発達したこの礫層は洪積段丘に由来、層厚約1.5m下で湧水層に達する。遺跡北側のため池はこのような硬い礫層の基盤上にあり、3号棟区中央にある窪地の延長部分を堤でせき止めた皿池である。

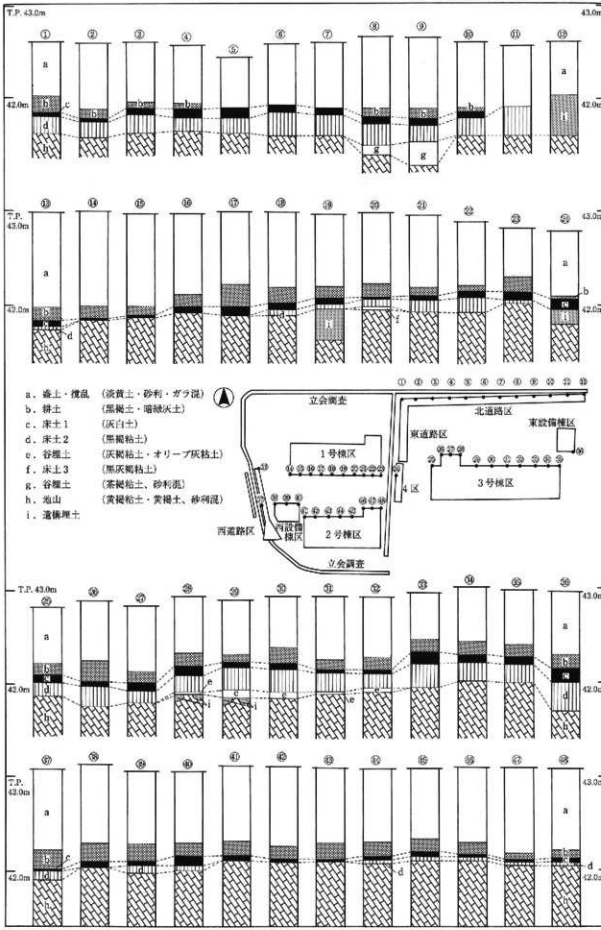

T.P. 43.0m
42.0m
a. 盛土・攪乱　(淡黄土・砂利・ガラ混)
b. 耕土　(黒褐土・暗緑灰土)
c. 床土1　(灰白土)
d. 床土2　(黒褐粘土)
e. 谷埋土　(灰褐粘土・オリーブ灰粘土)
f. 床土3　(黒灰褐粘土)
g. 谷埋土　(茶褐粘土、砂利混)
h. 地山　(黄褐粘土・黄褐土、砂利混)
i. 遺構埋土
立会調査
北道路区
東道路区
東設備棟区
1号棟区
2号棟区
3号棟区
4区
西道路区
西設備棟区
立会調査

図3　土層柱状図（1／40）

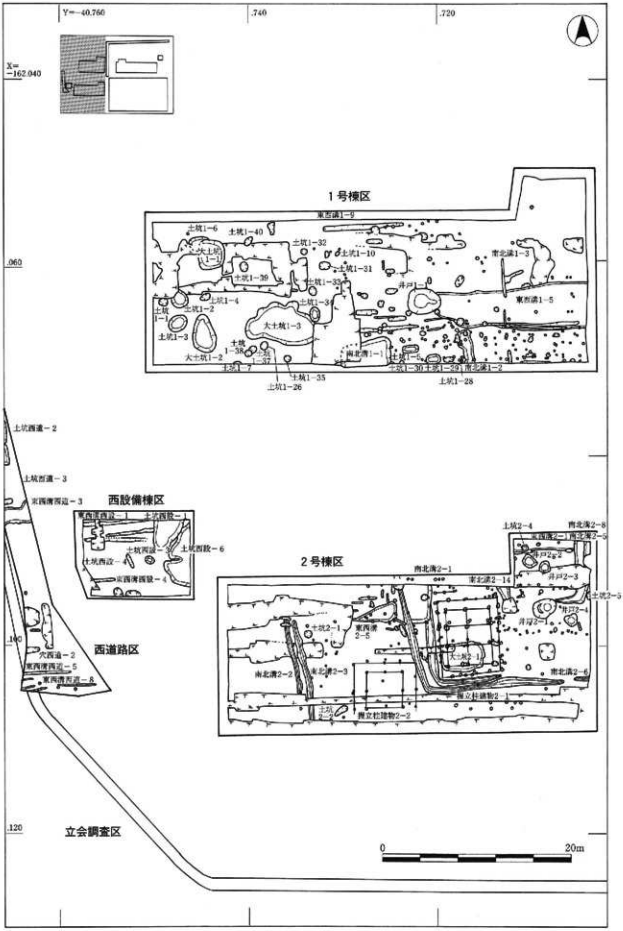


図４　遺構全体図（１）

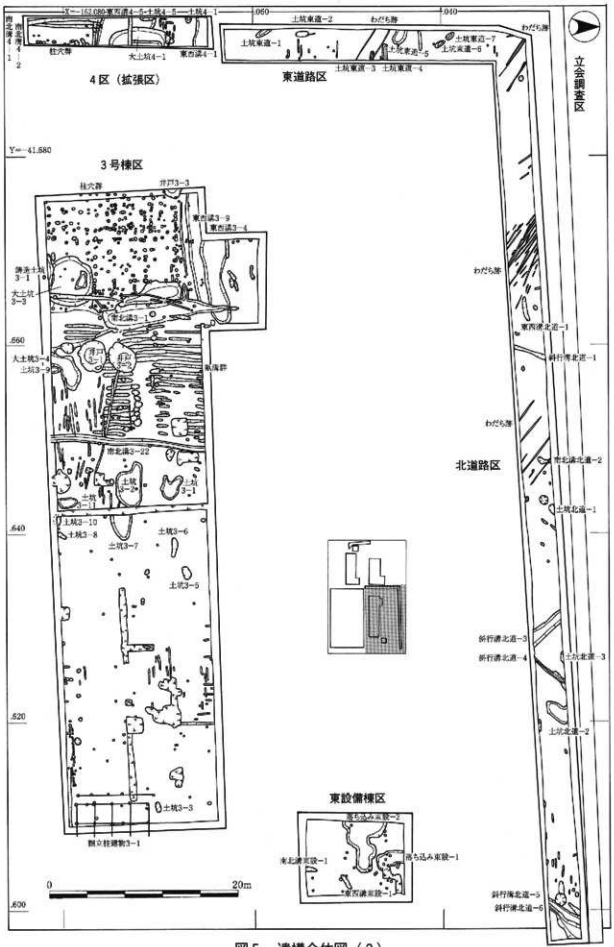


図5　遺構全体図（2）

第Ⅱ章　発掘調査

1．中世以前の遺構と遺物

a．不定形土坑群

余部遺跡の中世以前の土地利用は明快ではなく、古い遺構は飛鳥時代の小規模な建物群が遺跡南端の調査区（大阪府埋蔵文化財協会94年度調査区）で知られるのみである。第２次調査区（98－Ａ区）でも該当期の掘立柱建物が２棟発見されている。

今回調査でもっとも古い遺物は縄紋時代後～晩期に位置づけできる石鏃と弥生時代前・中期に位置づけできる石鏃である（図６　１～３　図版４）。余部遺跡のこれまでの調査では打製石器は発見されていない。しかし、阪和自動車道建設に伴う日置荘遺跡の調査では旧石器時代のナイフ形石器と石槍・縄紋時代と弥生時代の石鏃が発見されている。南河内の段丘を舞台に、太古のハンターたちが広域に活動を続けていた実態がうかがえる。

今回調査で中世以前の遺構としては１区を中心とする不定形土坑群をあげることができる。これらの土坑群は浅く、断面は船底状で遺物が全く含まれないことから、一部は上層の染み込みを遺構として誤認した可能性もある。しかし、大土坑１－１～３、土坑西設－６、土坑西道－２～３など、複雑な土層堆積を示す遺構もあり、人為的に掘削され、自然堆積で埋没したことを確認できる。以上の遺構は中世の遺構群と埋土の土質などが異なること、中世遺物をまったく含まないことから中世以前の遺構と認識した（図７）。

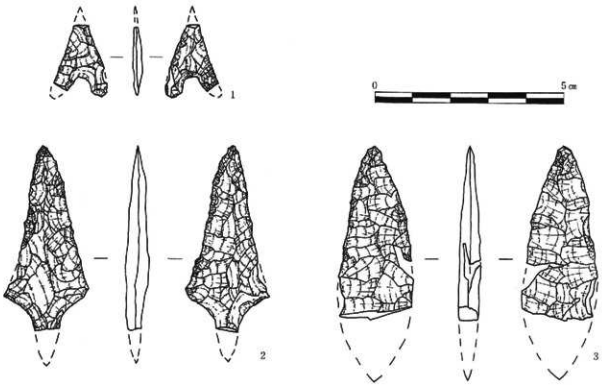


図６　打製石器（１／１）

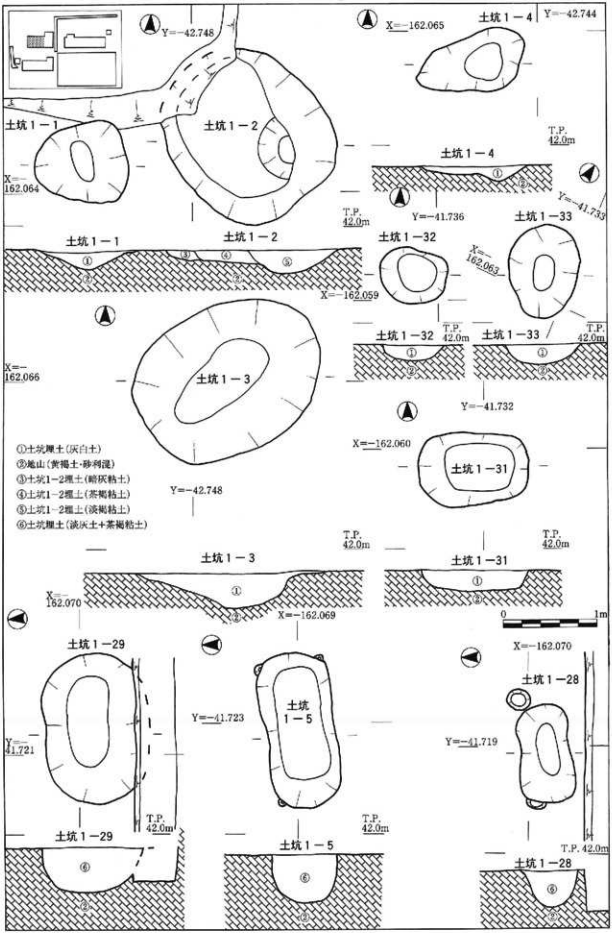


図７　不定形土坑群（１／40）

1号棟区西端で発見された大土坑1－3は東西7.6m、南北4.7m、深さ約0.3mでもっとも大きい。東端は土坑1－34によって切られる。1号棟区西北の大土坑1－1は土坑1－6を切り込んで営まれる。東西2.8m、南北3.2m、深さ約0.3mを測る。

1号棟区では大土坑の他に50の土坑が発見されている。土坑1－1～4は調査区の西隅で発見された。土坑1－2は東西1.8m、南北1.9m、埋め土は三層からなり深さ約0.25mを、土坑1－3は東西2.2m、南北1.6m、深さ約0.45mを測る。土坑1－32・33は調査区の中央で発見された。土坑1－32は東西0.7m、南北0.6m、埋め土は灰白土で深さ約0.25mを測る。

土坑1－5・1－28・1－29は1号棟区の南東、中世遺構群の中に発見された小判形の土坑で深さが0.5m程度、四隅に杭状の穴が伴う（図7）。埋め土は淡灰土と茶褐粘土のブロックによって人工的に埋め戻された様相を示し、いずれも類似する。便所遺構の可能性もあるが、中世の遺物は含まず時期は特定できなかった。

b．畝溝群

3号棟区の中央でほぼ南北に並んだ畝溝群が発見されている（図8）。もっとも長いもので南北7.1m以上を測る。南北の両端は確認できず、さらに長くなる。溝の幅は0.3～0.6m、深さ0.1～0.2m程度を測る。一部は土坑が連続する部分もある。畝溝の両側には本来掘った土が盛り上げられ、畝を連ねる畑を形成していたと考えるが、上面は削られ、畝や畑の土は残っていなかった。耕作物を特定するため、辻本裕也氏・辻康男氏（パリノ・サーベイ株式会社）に現地を観察してもらい、土壌サンプルを分析して頂いた。しかし、花粉などの植物遺体の遺存は確認できなかった。

同様の遺構が第2次調査でも東西20m、南北40m以上の範囲に発見されており、今回の遺構を含めると約1000㎡の範囲に畑が展開していたようだ。しかし、3号棟区の北側にある北側道路区では畝溝遺構は発見されなかった。畝溝群は南北に伸びるゆるやかな谷の低地を利用しており、畝溝群の東端には南北溝3－22が続き、雨水の侵入を防いでいる。この溝は第2次調査で発見された溝22に取りつくと考えられ、南北43m以上を測る（図8）。

第2次調査で発見された畝溝群には古墳時代後期（飛鳥寺下層式前後）の須恵器片が伴っており、25m東に同時代の掘立柱建物が確認されていることから、これらの建物に関連する古墳時代の畑であると考えられている。今回調査では畝溝から遺構・遺物は発見できなかった。しかし、南北溝3－22より同時期の壷が発見され（図8　4）、畝溝に伴うことが確認できた。

余部遺跡の真南約5kmのところには東除川を制御した狭山池が営まれている。この池の造営以前の斜面に営まれた須恵器窯（狭山池2・3号窯）は飛鳥寺下層式段階の特徴をもつ土器群が焼かれており、今回発見された畝溝群の時期とほぼ同時期である。そして、狭山池完成後の北堤斜面を利用して営まれた須恵器窯（狭山池1号窯）は飛鳥Ⅰ式土器が焼かれており、造営以前より一時期新しい。これまでの余部遺跡の調査では飛鳥Ⅰ式段階の土器群もいくつか発見されている

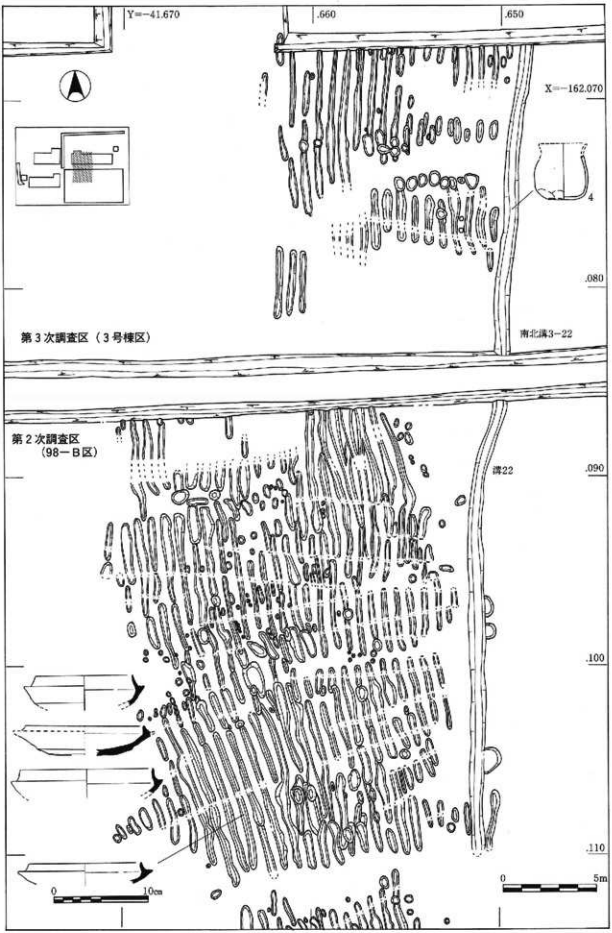

Y=−41.670
.660
.650
X=−162.070
.080
第３次調査区（３号棟区）
南北溝3−22
第２次調査区
（98−Ｂ区）
溝22
.090
.100
.110
0
10cm
0
5m

図８　畝溝遺構（１／200）

ものの、畝溝群には伴なわない。狭山池の造営を境に畑作が廃絶したと考えることもできる。畝溝群は部分的に切りあっており、形態や長短の差もあって、ごく短い一時期にすべてが掘削されたと判断することはできないが、長期にわたって耕作され続けたような重層性はない。狭山池の造営によって下流の灌漑が飛躍的に進み、付近の水田開発や稲作が盛んになったのだろう。

ちなみに、狭山池の北堤の造営は発見された木樋を年輪年代測定した結果、616年頃に行われたことが知られている。飛鳥寺下層式土器は飛鳥寺造営以前の整地層から発見された土器が基準になっており、『日本書紀』などの飛鳥寺造営記事より、588年直前と考えられている。一方、飛鳥Ⅰ式は641年に造営されはじめたという山田寺の整地土層や、645年の大化改新直後に焼失した蘇我一族の邸宅に伴うと考えられる甘樫丘東麓焼土層などから発見される土器の段階である。

c．発見遺物

発見遺物は縄紋、弥生時代の打製石器（図6　図版4）・土師器・須恵器がある（図9　図版4）。それに組み合わせ式石棺の側板らしい二上凝灰岩の破片、須恵質磚、重弧紋軒平瓦がある（図9　図版4）。土師器・須恵器は古墳時代後期（図9　4～7・11・15～18）・飛鳥時代（図9　8・9）・奈良時代（図9　10・12・13）のもので、すべて小片である。遺構に伴うものは前述の南北溝3－22発見の土師器小壺だけである。

縄紋時代の石鏃は凹基式で薄く、左右の両辺が先端近くでやや内側に折れるように作り出そうとした意識がみられる（図6　1）。それに対し、弥生時代の石鏃は概して粗製で厚く、凸基式と木葉形がある（図6　2・3）。いずれの石鏃もサヌカイト製で遺構に伴うものではなく、基部を欠損することから使用で欠損したと考える。

組み合わせ式石棺の破片らしい二上凝灰岩の破片は中世の井戸3－1上層に投棄されていた（図9　21）。中世に転用されたのだろう。板材を破砕する際にあけられたと考える直径約3cmの穿孔がある。現存の長辺51.6cm、短辺38.0cm、厚さ約13cmで、表面の風化が激しい。組み合わせの段をもち、形状から群集墳などに納められている石棺の側板断片と考える。同じ井戸内から形状のわからない小片がいくつか発見されており、遺跡の近くに古墳があったのかもしれない。

須恵質磚は二辺と一角が確認できる破片である。長辺17.7cm、短辺14.8cm、厚さ約5.3cmで表裏面に青海波紋の叩きが施されている（図9　19）。片面はよく擦れており、破砕後に焼けあとがある。青海波紋を施す須恵質磚はこれまで南河内地域の古墳や廃寺などの10遺跡から発見されており、鍋島隆宏氏によって製作技法などの類似性から「南河内型同心円文磚」と名付けられた。それは縦32cm、横24cmの規格品だったことが説かれ、流通年代は7世紀中頃の飛鳥Ⅱ式段階前後とされる。

重弧紋軒平瓦は小片で、瓦当はへらの削り出しによって一条の沈線を作り出す（図9　20）。

土師器は小壺・高坏・皿などがある。高坏は坏部に皿状の蓋が取りつくもので器高は低く、古墳時代後期～飛鳥時代と考える。胎土は明赤褐色で表面の剥離が激しく、いずれも基部の小片の

み図示できた（図9　5～7）。小壷は手づくねで極めて薄く作り出す。発掘に際し、口縁部を欠損してしまったが完形で南北溝3－22に埋没していたようだ。

須恵器は蓋坏・器台・短頸壷・甕がある。蓋坏は口径が小さく、身の立ち上がりが退化した飛鳥Ⅰ～Ⅱ段階のもの（図9　8・9）、身に高台がつき、蓋が扁平になる奈良時代のものがある（図9　10・13）。器台はもっとも簡略が進んだ小形品で胴部の直径が約6.8cmで、底部直径は22.8cmを測る。三角形の透かし穴と棒状に形骸化した波状紋を装飾する（図9　11）。壷は頸部が肩部端を折り返しただけのものがある（図9　16）。甕は小形で口縁端部を丸くしあげ、ラッパ状に広げるもの（図9　15）、口縁端部をやや尖らせて平らに仕上げるものがある（図9　17・18）。その他、底部径7.2cmを測る奈良時代末頃と考える糸切り底の壷がある（図9　14）。

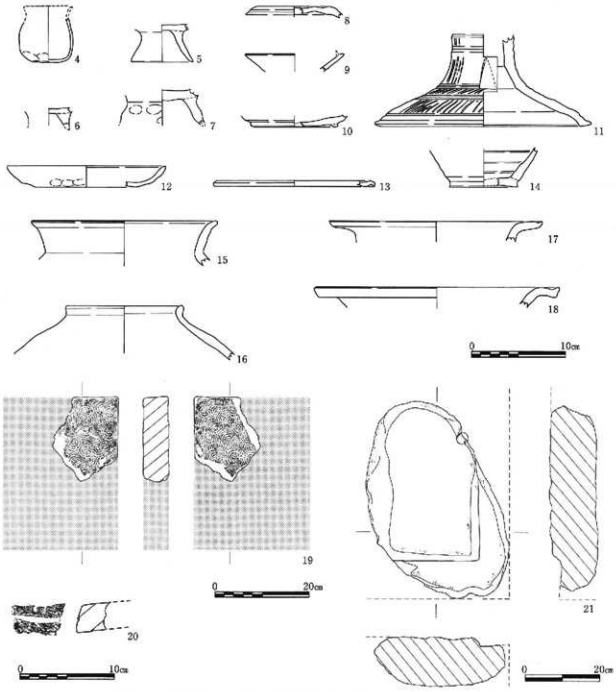


図9　中世以前の土器・瓦磚類（1／4・1／8・1／10）

2．中世の遺構と遺物

a．遺構概要

1号棟区南東、2号棟区北東、3号棟区西にまたがって、鎌倉時代の柱穴や溝が密集して検出された。さらに、これらの遺構を囲み込むように溝群が発見されている。溝は不定形で浅く、部分ごとに掘り直されたような掘り底をしめす（図10）。

1号棟区では東西溝1－5が発見された（図11）。西側は井戸1－1の東で途切れがちとなるものの、南に折れ曲がって南北溝1－1に取りつくと考える。南北溝1－1は1号棟区の調査区外へと南に続き、その延長上には2号棟区の南北溝2－1が発見されている（図13）。南北溝2－1は埋没する段階で、さらに南に伸びる南北溝2－6・2－7が掘削されて、大土坑2－1を取り囲むように東におれ、調査区外へと続く。

また、2号棟区の北隅では東西溝2－1が発見されており、調査区東側外の延長上には第2次調査区（98－A区）の溝98－24・47が東西に伸びる。この溝群は延長約25mで東側が途切れる。北側調査区外に折れ曲がると考え、折れ曲がった先には3号棟区の南北溝3－1が検出されている（図24）。南北溝3－1の北側は東西溝3－4・9と重なっており、東西溝3－4・9は西に調査区外へと続く。その一部は4区で東西溝4－1となって検出され（図31）、その先は冒頭に示した1号棟区の東西溝1－5に再び戻って接続すると考える。つまり、第2・3次調査によって方形に区画された溝群の四隅が発見されたと考える。柱穴はこの方形区画の内側に密集し、区画の外側には中世の遺構がほとんどなかった。

柱穴群は柱痕跡を残すものも多くあり、切り合いもあることから、何度か建て替えられた複雑な家屋構造だったと考える。しかし、一つ一つの穴は小さく浅い。埋め土はほとんどの柱穴が共通し、その違いや含まれる遺物から柱穴の対応関係は読み取れなかった。柱穴が多く密集する部分はいくつかの案で建物配列を復元することができ、本来どのような建物があったのか明確にすることはできなかった。しかも、井戸3－1は短い柱の礎石に転用したらしい凝灰岩板石や礫が投棄されており（図9　19・21）、建物配置の実態は予想以上に複雑なようである。

井戸は1号棟区に1基（図12）、2号棟区に2基（図23）、3号棟区に3基発見されている（図25）。第2次調査区でも2基以上確認されており、密度は高い。特筆すべきは、井戸・土坑・溝の中に鋳型や鉄カスなどの鋳造関連遺物が廃棄されていたことである。方形区画は鋳造工人の居住区と作業場を兼ね備えていたことがわかる。

方形区画やその内部の遺構から発見された遺物は瓦器椀がもっとも普遍的で、二型式に大別できる。Ⅰ期の瓦器椀は高台の先端が尖る断面三角形か貧弱な断面方形で、外面はあらい暗紋を施し、内面の見込みにも格子状などの暗紋を施す段階である（図18・26・33　図版5）。Ⅱ期の瓦器椀は高台が粘土紐を貼り付けただけの簡略されたもので、外面の暗紋もほとんどなく、内面の暗紋にも隙間が大きく、見込みは櫛歯状、連環状に施される段階である（図27・28　図版6）。しかし、瓦器椀には器高が3cm程度まで矮小化されたり、高台が省略される段階のものはない。

瓦器からの暦年代の論議は諸説分かれるものの、建物群は室町時代頃には廃絶しているということがわかる。

共伴する土師器皿は「て」字状に口縁部をおり返す段階のものを含まない段階であり、集落は12世紀の平安時代末期には造営されていなかったようだ（図19・29　図版5・6）。あわせて、12世紀頃まで続く土師質甕も発見されておらず、煮沸具の大半は土師質羽釜である。土師質羽釜は12世紀後半から普及し、13世紀後半以降は瓦質羽釜に取ってかわる。今回調査では瓦質羽釜が2点発見されており、廃絶段階は過渡的様相である。しかし、瓦質すり鉢は1点も発見されておらず、すべて東播系だった（図22・29・33・42・43　図版5）。

中国陶磁は11～12世紀前半代の白磁が量的に多く見られるがしかし、同安窯系青磁も共存することから13世紀前半代の様相を示すと考える（図34）。ただし、13世紀後半以降に出現する外面に鏑蓮弁紋を刻む龍泉窯系青磁碗が一点のみ発見されている（図34　210）。

Ⅰ期のみの遺物を含む遺構は少なく、井戸1－1・土坑2－4・井戸3－2などがある。ただし、大半のⅡ期の遺物を含む遺構にはⅠ期の遺物も伴っており、Ⅰ期以来継続していた遺構と判断できる。以上より、今回発見された方形区画内の中世遺構群は13世紀はじめから前半を中心とした鎌倉時代前～中期のものと位置づけ、13世紀後半のはやい段階で廃絶すると見てよいだろう。

以下、遺構の詳細については各調査区ごとに報告する。

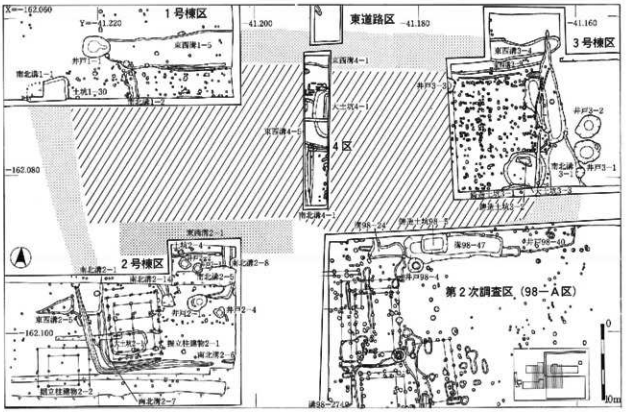


図10　方形区画復元図（1／500）

b．1号棟区の遺構と遺物

方形区画内の柱穴群は掘立柱建物に復元できるまとまりを読み取ることはできなかった（図11 図版1）。柱穴は合計135基発見されている。すべて断ち割り調査を行った結果、柱痕跡を残すものが数多くあり、埋め土に柱根を残すものは柱穴1－1－2・1－3－27・1－4－48があった。また、混入した可能性が強いものの中世の土器片を埋め土内に確認できた柱穴は27基にのぼった。柱穴1－2－9には完形の瓦器小皿が、柱穴1－3－21には焼成後に穿孔された瓦器小皿片があった。その他、Ⅰ期の瓦器椀を含む柱穴は柱穴1－1－2・1－3－14・1－3－23で、確実にⅡ期とわかる柱穴の遺物はなかった。

東西溝1－5は東西17.3m以上、幅約5.2m、深さ約0.1mを測り、東側は拡張区の東西溝4－1へと続く（図11 図版3a.b）。西側は途切れがちとなる。東西溝1－1～4などの鋤溝群が残るので、後世に削平されたと考える。埋め土は茶褐土で下層には暗褐粘土が部分的にある。流水はなかったと考える。Ⅰ期・Ⅱ期の瓦器・瓦・土師質羽釜が発見された（図11 22～25）。

南北溝1－1は南北3m以上、幅5.2m、深さ約0.5mを測り、北側は途切れるが、本来は東西溝1－5と連結していたと考える（図11）。南側は2号棟区の南北溝2－1へと続く。埋め土は暗褐土で下層には炭混じりの暗褐灰土などがあり、一時期帯水していたようだ。Ⅰ期・Ⅱ期の瓦器椀・皿、土師質羽釜・皿の他、鋳造関連遺物である炉壁片と青銅製品が発見された（図12 29～31）。瓦器椀はⅠ期が多い。

南北溝1－2は南北3.6m以上、幅0.75m、深さ約0.4mを測り、南側は2号棟区の南北溝2－14へと続く。北側は東西溝1－5に接続することなく途切れ、土橋を形成する。埋め土は暗褐土で、人工的に埋め戻されたらしく地山ブロック土が混じる。掘り底から7つの柱穴が発見されている。これらの柱穴は溝の掘削以前に使われていたと考える。埋め土内にⅠ期・Ⅱ期の瓦器椀・土師質羽釜・皿、東播系すり鉢が含まれていた。

井戸1－1は南北2.8m・東西3.6m、深さ4.0mの素掘りである（図12）。東側にステップがあり、水くみの足場だったのだろう。南に土坑1－26、柱穴1－4－29がある。埋め土は上層が茶灰粘土ブロックなどによる複雑な堆積状況で、人工的に埋め戻される。中層・下層は暗灰褐強粘土・青灰強粘土など、ヘドロで充填されている。最下層はガマになっており鋳造関係の廃棄品である鉄カスや炭化物混じりの砂層がある。この炭化物は中・上層の壁面にこびりついており、井戸の廃絶段階でまず鋳造関係の廃棄品が捨てられ、長期間放置された後に雨水などと共にヘドロが充満し、上層は一気に埋め戻されたと考える。最下層の青灰粘土層からⅠ期の瓦器椀と土師質羽釜が、上層からもⅠ期の瓦器、土師質羽釜・皿が発見された（図12 26～28）。

土坑1－30は南北溝1－1の東肩で発見され、直径0.8m、深さ約0.5cmを測る。埋め土は砂利の混じる暗茶褐粘土で上層より鉄素材（図37 237）と瓦器椀片が発見された。

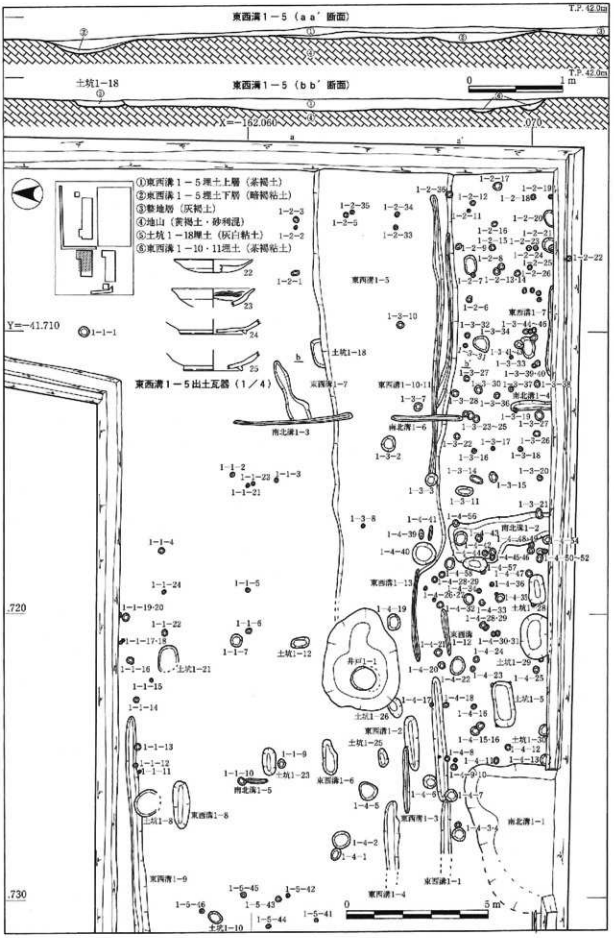


図11　1号棟区中世遺構図（3／400）

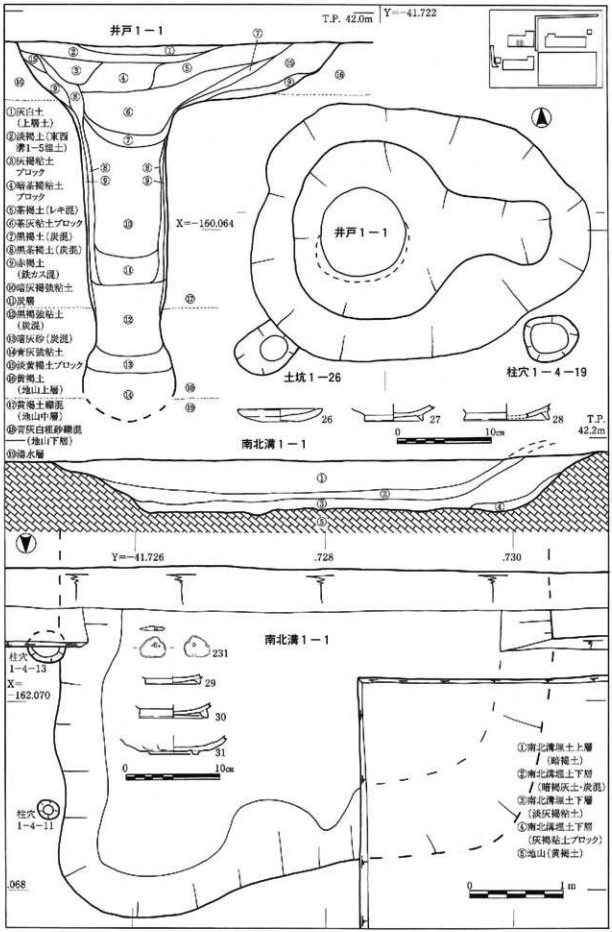


図12　井戸１－１・南北溝１－１（１／40）

c．2号棟区の遺構と遺物

方形区画内の柱穴群は掘立柱建物に復元できるまとまりを2棟のみ読み取ることができた（図14・15）。柱穴は合計172基発見されている。すべて断ち割り調査を行った結果、柱痕跡を残すものが数多くあり、埋め土に柱根を残すものは柱穴2－2－48・大土坑2－1内の柱穴2－5－1aだった。また、川原石を根石や礎石にする柱穴も多くあり、柱穴2－1－9・2－2－77・2－2－80・2－2－87は平瓦片を礎板状に敷いていた。

その他、中世の土器片を埋め土内に確認できた柱穴は44基にのぼった。これらは抜き取り跡や埋め土中に混入した可能性が高い。柱穴2－2－32には完形の瓦器小皿が、柱穴2－5－1iには白磁片があった。その他、Ⅰ期の瓦器椀を含む柱穴は柱穴2－1－1・2－1－7・2－1－51・2－2－10・2－2－33・2－2－43・2－2－56・2－2－92で、Ⅱ期の瓦器椀を含む柱穴は2－2－87だけだった。柱穴2－2－10は焼け土・炭・鋳型破片・土器片などが充填されており、柱を抜いたあとに廃棄された可能性が高い。

掘立柱建物2－1は柱間が約2～2.4m、三間×二間の南北棟で四方に庇をもつ総柱建物で、全長南北8m、東西6.4mを測る（図14）。柱穴は形・位置ともに不揃いで、柱を二重、三重に掘える部分もある。柱穴は大きいもので直径70cm、小さいもので10cm程度である。柱穴の深さは20～40cmで、大半は柱痕跡が明瞭に残り、掘り底に根石や瓦片を据えるものもあった。埋め土に瓦器・土師器を含むものが少量あり、Ⅰ期・Ⅱ期の瓦器椀がみつかっている。建物内部に大土坑2－1を、建物の西と南に南北溝2－6・2－7を伴う。

掘立柱建物2－2は柱間が約2m、二間×二間以上で東西と北側に張り出しをもつ。全長は東西6.5m、南北4.8m以上を測る（図15）。張り出し部分の柱穴は不揃いで、北側は柱を二重に据える部分もある。南側が削平されており、本来は庇などがとりつくかもしれない。柱穴の直径は約20cm、深さは10～20cmで柱痕跡や柱根の残るもの、埋め土に遺物を含むものはなかった。

東西溝2－1は東西7.3m以上、幅2m以上、深さ約0.12mを測り、東側は98－A区の溝98－14・24・47へと続く。西側は南北溝2－14、南北溝2－1に取りつくらしい。埋め土は茶褐粘土で砂利が混ざる。流水堆積はない。Ⅰ・Ⅱ期の瓦器・瓦・土師質羽釜が少量発見された。また、掘り底より3基の東西に並んだ柱穴群と土坑2－3・2－4が発見された。

土坑2－4は直径約0.8m、深さ約0.5mを測り、下層の灰褐粘土内からⅠ期の瓦器椀・皿、土師器皿・羽釜などが大量に発見されている。瓦器椀は15個体がほぼ完形で廃棄された様相で出土している（図18・19　図版5）。東西溝2－1はこの土坑や柱穴群より新しいと考える。

東西溝2－5は東西約5m、幅約2m、深さ約0.05mを測る。東は南北溝2－6との間に土手を残すように切り込まれ、西側は先細りしてとぎれる。溝の中央に柱穴2－3－28、2－3－31、2－3－33が等間隔に並び、さらに東にも柱穴2－3－46が並ぶ。これらは溝の上面では確認されず、東西溝2－5が掘削される以前の施設と考える。遺物は瓦器小片のみ確認されている。

南北溝2－1は南北5m以上、幅2.8m、深さ約0.5mを測り、北側は途切れるが、本来は南北

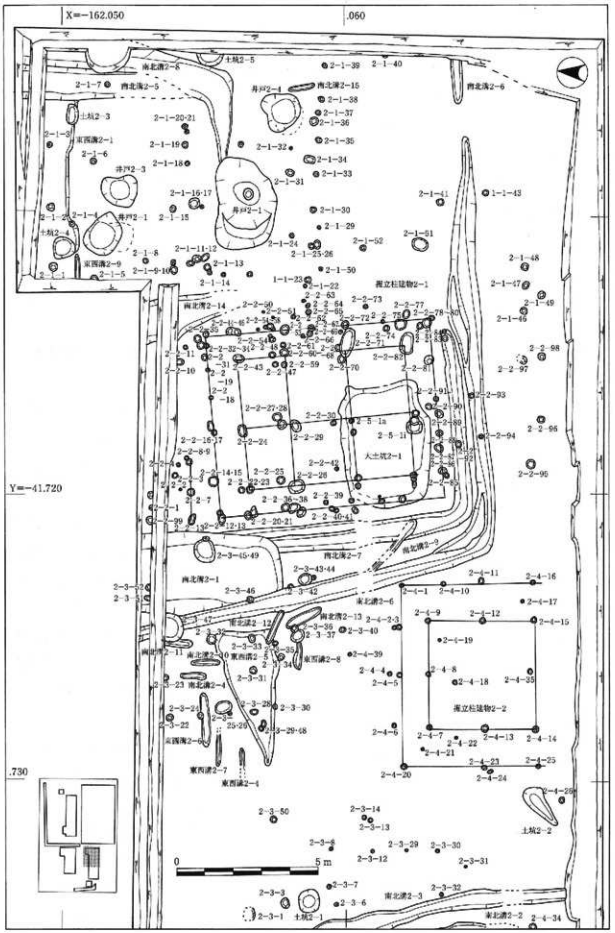


図13　2号棟区中世遺構図（3／400）

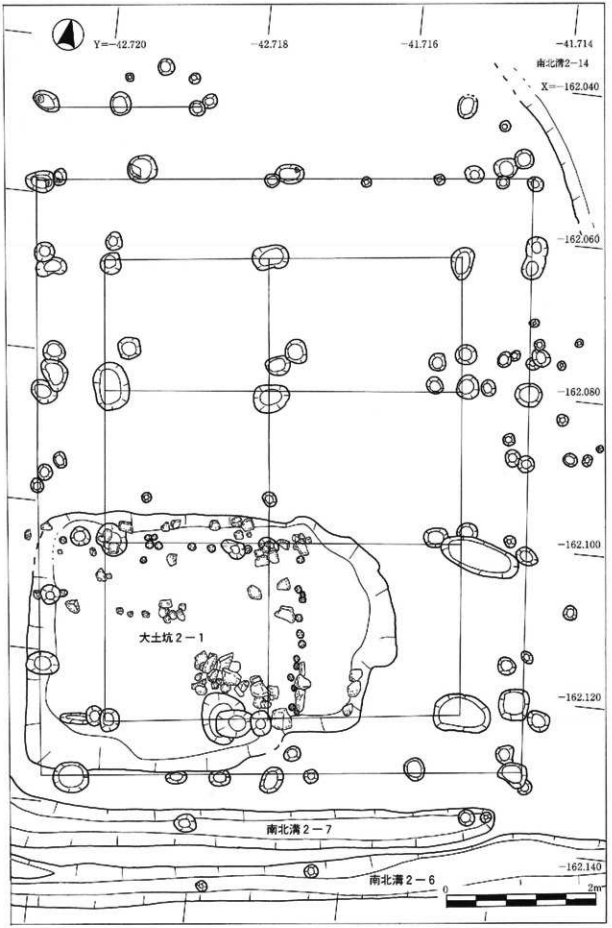


図14　掘立柱建物２−１（１／50）

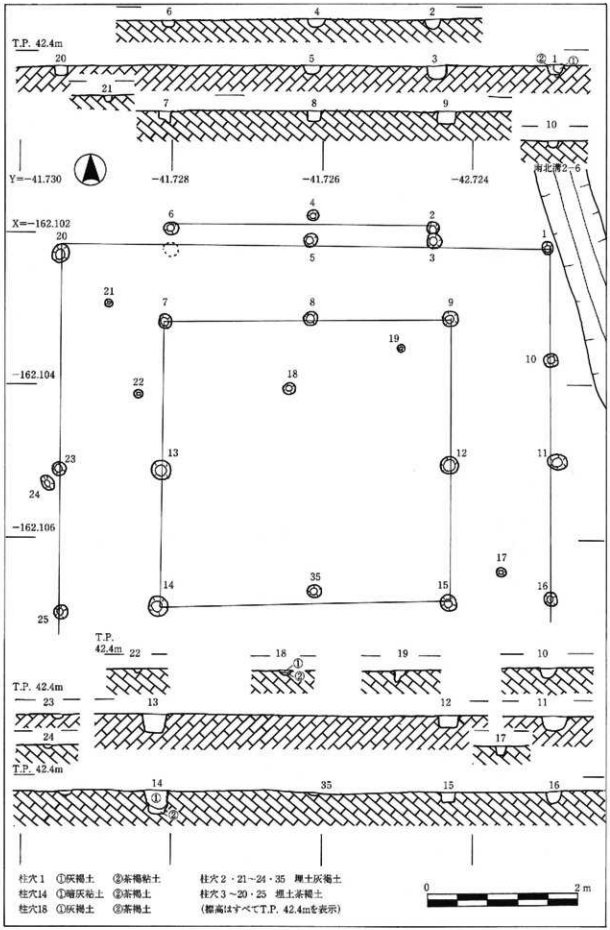


図15 掘立柱建物2−2（1／50）

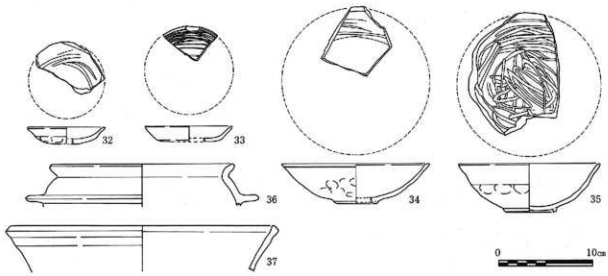


図16　南北溝２－５出土土器（１／４）

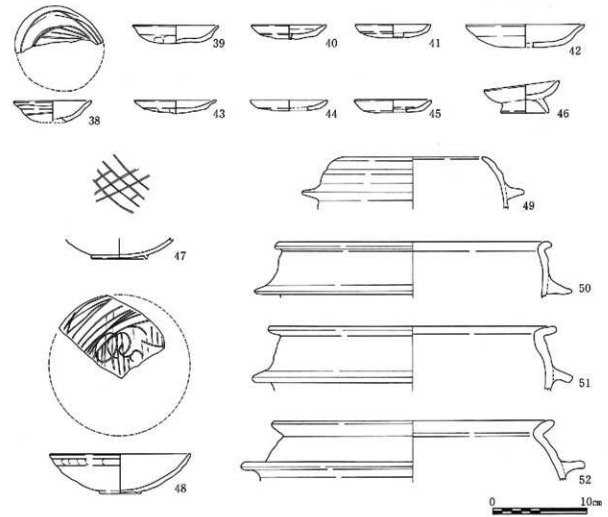


図17　南北溝２－８出土土器（１／４）

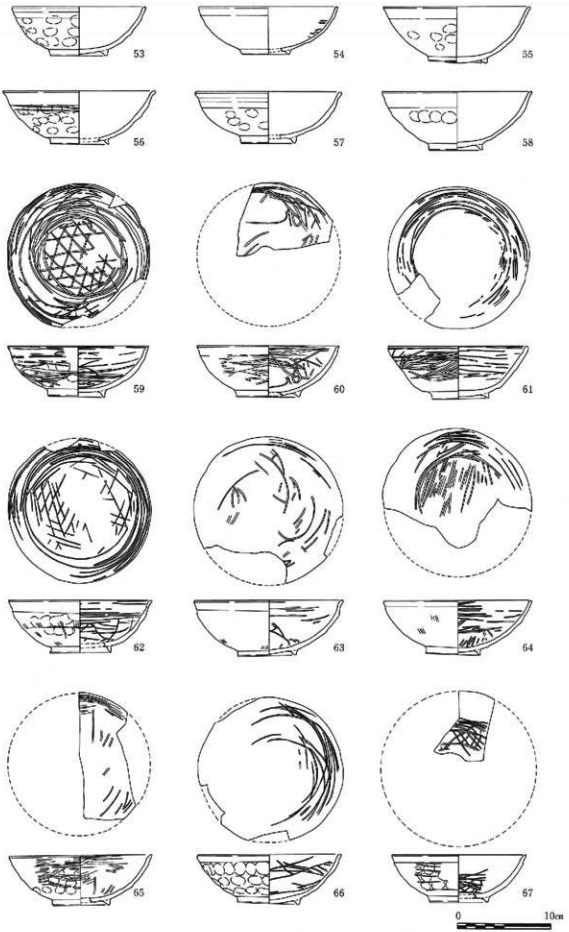


図18　土坑２－４出土土器（１）（１／４）

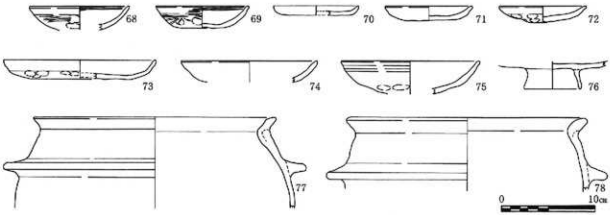


図19　土坑２－４出土土器（２）（１／４）

溝１－１と連結していたと考える。埋め土は礫混じりの暗褐土が下層で、上層は淡灰褐土と炭混じりの黒褐土層があり、帯水していたようだ。Ⅰ期・Ⅱ期の瓦器椀、皿などが発見された。

南北溝２－１の上面に南北溝２－６、南北溝２－７が検出された。この溝は等間隔に南にのび掘立柱建物２－１を囲むように東におれる。南北溝２－６は南北12.5m以上、南側で東におれて17m以上を測る。幅は約0.8m、深さ0.2m程度ある。埋め土の下層は炭や焼け土混じりの黒褐土層、上層は茶灰粘土で埋没する。下層の炭や焼土は大土坑２－１の埋め土と共通する。鋳造作業のあとに残土で埋め立てられた様相を示す。南北溝２－７からはⅠ期・Ⅱ期の瓦器椀・皿と土師器皿などが発見された（図20）。

南北溝２－14は南北2.5m以上で南側は攪乱によって削られる。東におれて井戸２－１に接続していた可能性がある。幅は約1.2m、深さ0.3m程度を測る。埋め土は茶褐土で瓦器小片が発見されている。北側は１号棟区の南北溝１－２に取りつくのだろう。

東西溝２－１をきるように南北溝２－５、南北溝２－８が重なって検出された。南北溝２－８は西におれて南北溝２－５と合流し、井戸２－１に接続、水が流れ込むようになっている。南北溝２－８は南北７m以上、南側で西におれて約2.5mを測る。幅は1.5m程度で調査区東側外に肩が上がる。深さは0.2m程度ある。埋め土は赤褐灰土で、北隅には土器が大量に包含されていた。南北溝２－５の埋め土は青灰粘土で帯水の痕跡が伴う。両溝からはⅠ期の瓦器椀・皿、土師器皿・羽釜などが発見された（図16・17）。

南北溝２－２・２－３は調査区西端で等間隔に並んで検出された。南北溝２－３は南北約15m幅約0.5m、深さ約0.1mを測る。両溝とも埋め土は茶褐土で遺物は含まない。上面の包含層でもこの付近には中世の遺物がほとんど散在しておらず、集落の西端を画する様相を示す。

井戸２－１は調査区東端にある（図23）。南北2.2m、東西3.2m、深さ1.2mですり鉢状の素掘り井戸である。東に南北溝２－８がとりつく。埋め土は上

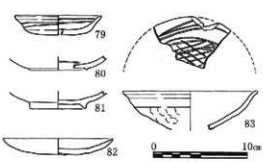


図20　南北溝２－７出土土器（１／４）

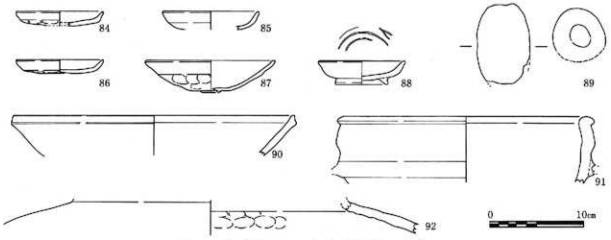


図21　大土坑２－１出土土器（１／４）

層が黒褐灰土で、炭や鉄カスなどの鋳造関連の廃棄物を大量に含み、人工的に埋め戻される。中層・下層は黄灰土・青灰強粘土など自然堆積のヘドロである。掘り底は湧水層に達しておらず、溝などから雨水を導き溜める機能だったと考える。上層の炭・鉄カス混じり層からⅠ期の瓦器椀・皿と土師質羽釜、東播系すり鉢が発見された（図22）。鋳造関連遺物は炭と鉄カス以外発見されなかった。

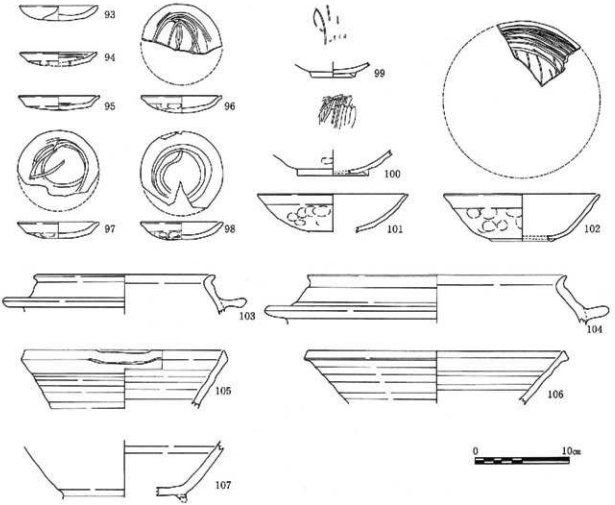


図22　井戸２－１出土土器（１／４）

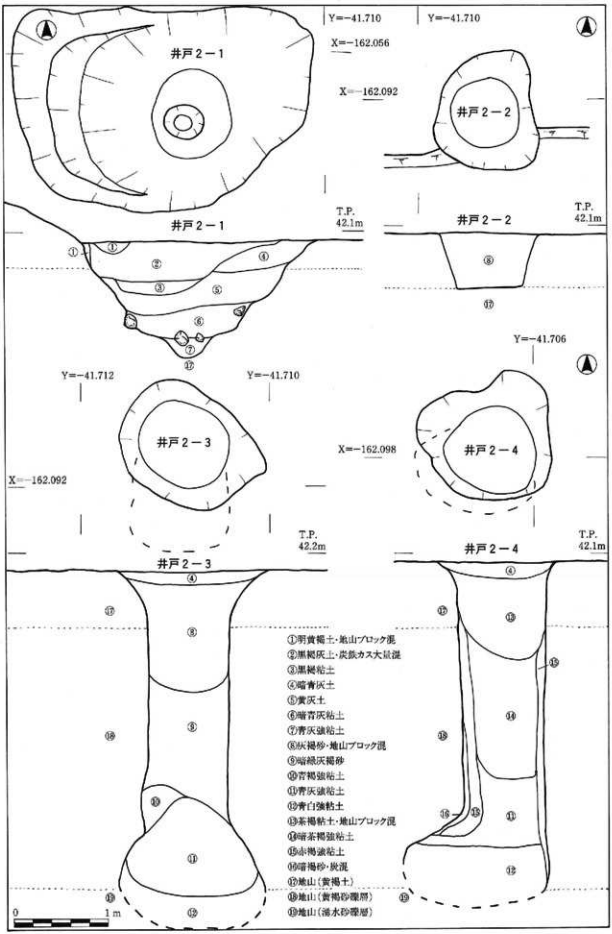


図23　井戸２－１～４（１／40）

井戸２－４も調査区の東端にあり、南北、東西とも1.4mを測る素掘り井戸である（図23)。掘り底は検出面から約3.5mで湧水層に達しており、ガマになっている。埋め土は上層が茶褐粘土に地山粘土ブロックなどが混ざり、人工的に一気に埋め立てられた様相を示す。中層・下層は青白強粘土・青灰強粘土などのヘドロで充填されている。これらの層と地山との境には上層からの流れ込みがみられ、徐々に埋没する過程がわかる。しかし、遺物は含まなかった。

その他、調査区の東端では井戸２－２・２－３が確認された。しかし、両遺構は近世の陶磁器や瓦を包含しており、中世遺構の廃絶後に営まれたものである（P50)。

掘立柱建物２－１の南西隅に東西約4.8m、南北約3.3m、深さ0.55mをはかる方形の大土坑２－１（図14　図版２）がある。掘り底は大部分が赤く変色しており、掘立柱建物の柱穴もみつかっている。大土坑の北側と東側に多数の杭を打ち込んだあとが残る。埋め土には多くの円礫が含まれ、焼けこげた痕跡の残るものもあった。また、大量の炭とともに鋳型片・炉壁片・鉄サイ・フイゴ羽口片などが発見されている。建物の廃絶段階で鋳造関連の廃棄土坑になったようだ。ただし、大土坑の底部が焼けていることから建物内で鋳造作業が行われていた可能性が高い。他に、Ⅱ期の瓦器椀や土師器皿・羽釜、東播系すり鉢などが発見された（図21)。

d．３号棟区の遺構と遺物

方形区画内の柱穴群は非常に密集しており、掘立柱建物に復元できるまとまりを明快に読み取れなかった（図24　図版３)。柱穴は300基以上発見された。すべて断ち割り調査を行った結果、柱痕跡を残すものが数多くあった。しかし、埋め土に柱根を残すものは発見されなかった。

中世の土器片を埋め土内に確認できた柱穴は94基にのぼる。中でも、柱穴３－４－10・３－６－３・３－６－10・３－７－１には50片以上含まれており、抜き取り跡を利用して意図的に廃棄されたのかもしれない。また、柱穴３－７－１・３－７－７には完形の瓦器小皿が、柱穴３－９－18・３－９－19には常滑焼大甕片が、柱穴３－６－13には白磁碗破片があった。鋳造に伴う鋳型片や炉壁片を含む柱穴も、柱穴３－９－11・３－10－８・３－10－16・３－11－19の４基あった。その他、Ⅰ期の瓦器椀を含む柱穴は柱穴３－１－７・３－１－８・３－６－２・３－６－10・３－６－13・３－６－20・３－７－１・３－７－10・３－７－20・３－９－６・３－９－13・３－９－16・３－９－18・３－10－１・３－10－20の15基、確実にⅡ期とわかる柱穴の遺物はなかった。

東西溝３－４・３－９は東西15.3m以上、幅3.3m以上、深さ約0.15mを測り、西側は４区の東西溝４－１、さらには１号棟区の東西溝１－５へ接続すると考える（図24)。東側は南北溝３－１と重なり合って接続する。埋め土は茶褐土で砂利が混ざる。流水堆積はない。Ⅰ期・Ⅱ期の瓦器が少量発見された。東西溝３－９は北側が東西溝３－４に切られる形だが、本来の地形は北側が低く、一連の溝が二段掘りされたのか、あるいは拡張して掘り直したのかもしれない。埋没土には明瞭な違いが見られなかった。

図24　3号棟区中世遺構図（3／400・1／40）

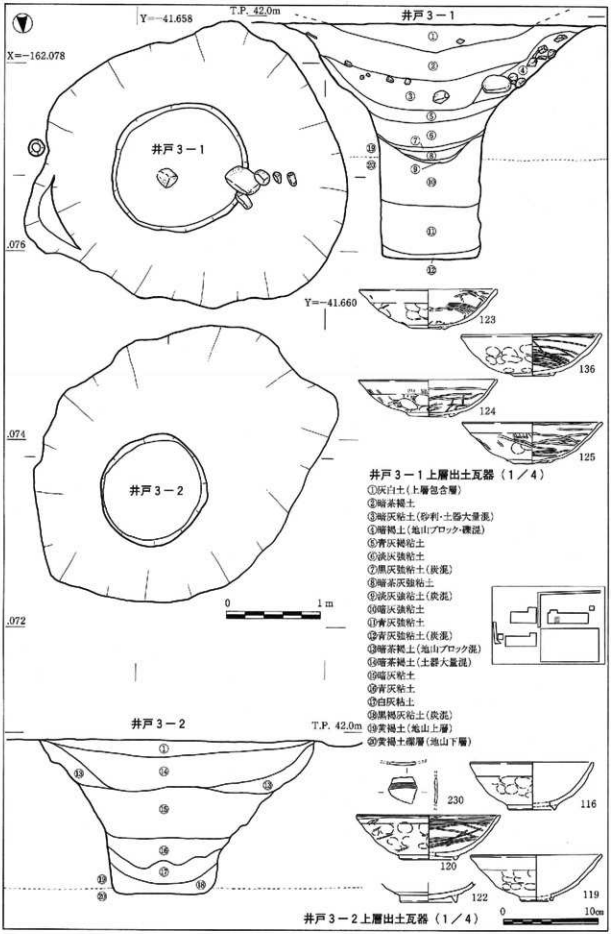


図25　井戸３－１・３－２（１／40）

東西溝３－９の南、方形区画内に並行する東西溝３－10がある。東西8.8m、幅0.3m、深さは約0.1mを測る。遺物はない。建物群に伴う雨落ち溝かもしれない。

南北溝３－１は南北約20.3m以上、最大幅6.3m、深さ約0.8mを測り、南側は98－Ａ区の溝98－47へ接続すると考える（図24）。北端は東西溝３－４・３－９と重なって接続する。掘り底は不規則でいくつかの溝が連結しているかのように見える。しかし、上層の埋め土は茶褐土で共通する。Ⅰ期・Ⅱ期の瓦器などが発見された（図28～29）。地形が北に低くなるにもかかわらず、南北溝３－１の北側は先細りとなる。掘り底が一定しない理由は、ところどころで帯水させるためかもしれない。

南北溝３－１の西に並行して、方形区画内に南北溝３－２がある。南北９m以上、幅0.3m、深さ0.1m程度を測る。遺物はなく、埋め土は淡褐粘土で流水堆積もない。東西溝３－10同様、建物群に伴う雨落ち溝かもしれない。

南北溝３－１のすぐ東で井戸３－１、３－２が並んで発見された（図25）。井戸３－１は検出面での直径約2.6m、下層の直径が約1.5mで、深さは2.4mを測る、すり鉢状の素掘り井戸である。埋め土は上層が暗茶褐土・暗灰粘土で礫や遺物が大量に含まれる。中層・下層は暗灰強粘土・青灰強粘土などで、自然堆積のヘドロで充填されている。掘り底は湧水層に達しておらず、溝などから雨水を導き溜める機能だったと考える。上層からⅡ期の瓦器椀・皿、土師皿・土師質羽釜、東播系すり鉢、青磁・白磁などが大量に発見された（図27　29・34・37　図版表紙・図版

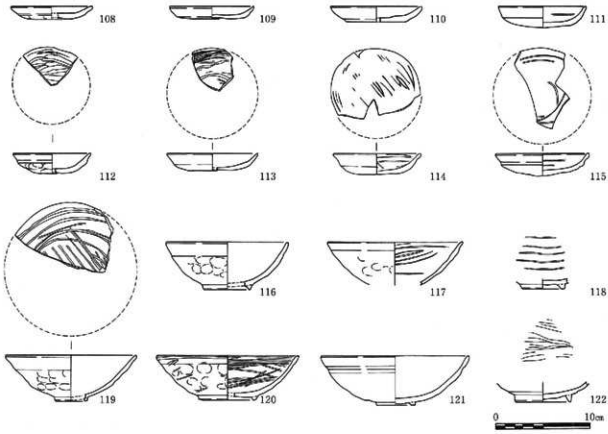


図26　井戸３－２出土土器（１／４）

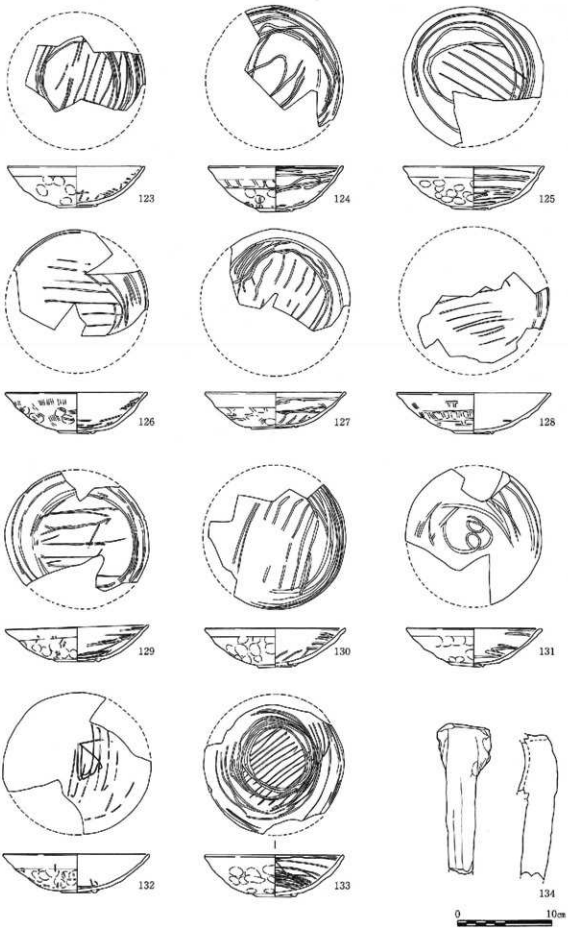


図27　井戸３－１出土土器（１／４）

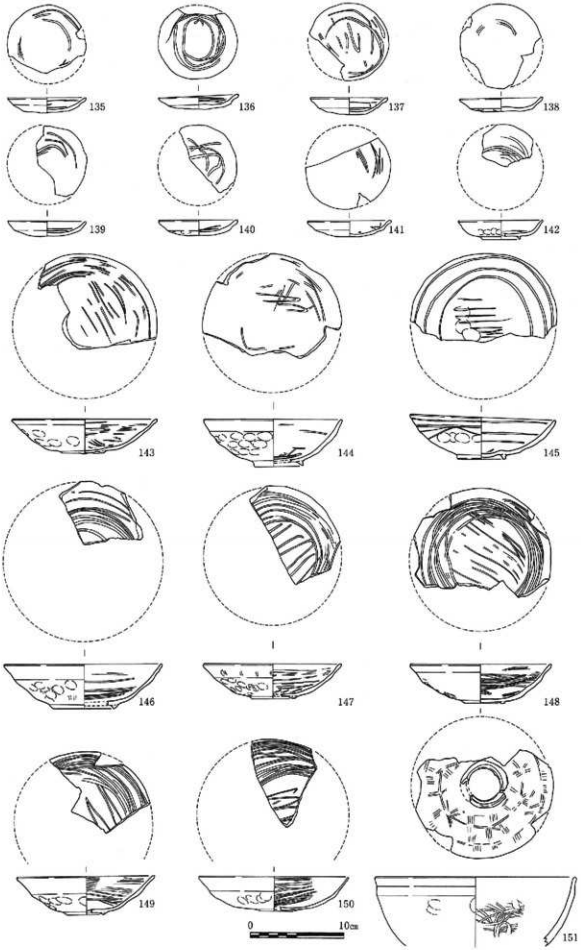


図28　南北溝３－１他出土土器（１）（１／４）

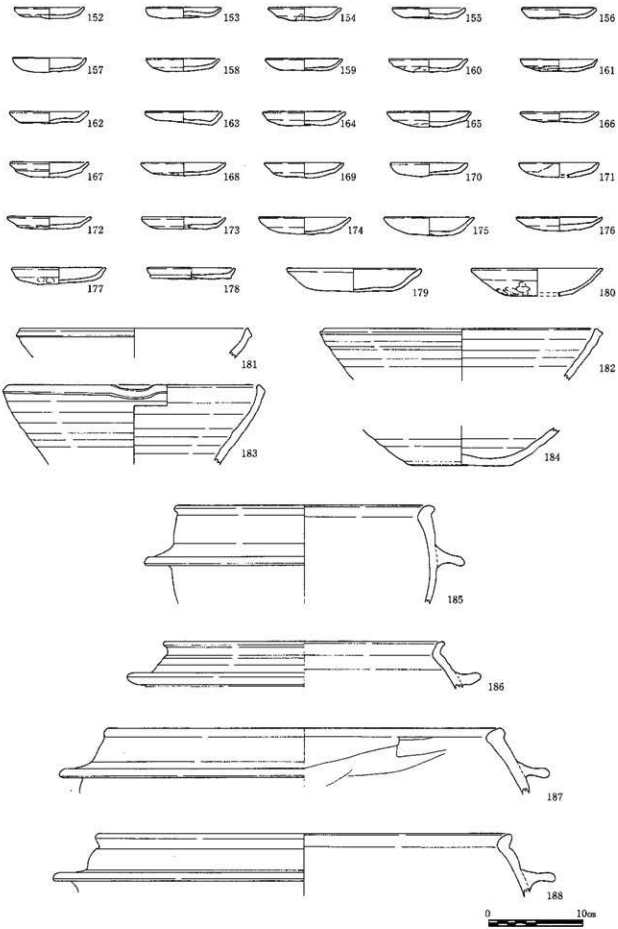


図29　南北溝３－１他出土土器（２）（１／４）

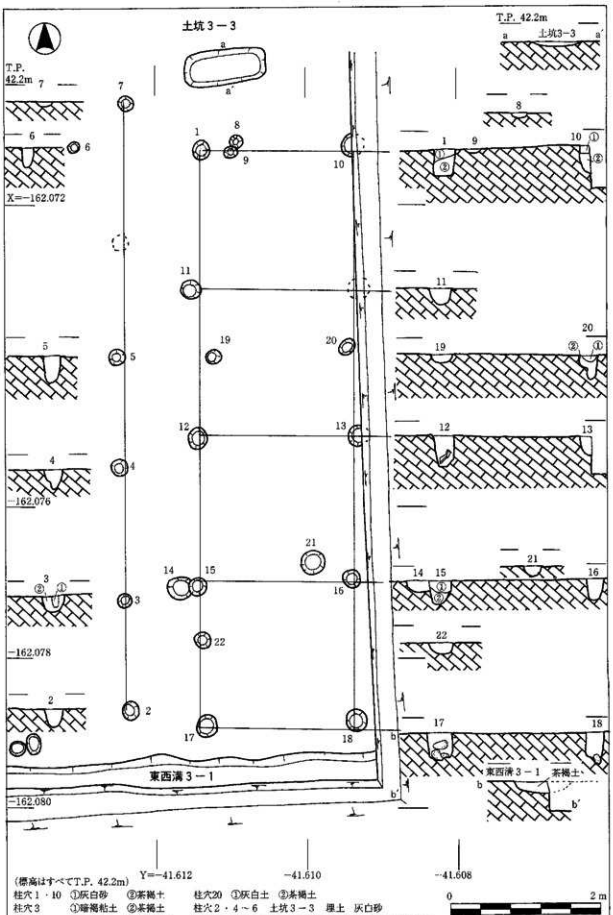


図30　掘立柱建物３－１（１／50）

6)。特に同型式の瓦器椀・皿の量が多く、図示したものは一部である。

井戸３－２は井戸３－１のすぐ北側にある（図25)。規模・直径もほぼ同じ程度で検出面の直径約2.4m、下層の直径0.75m、深さは2.0mで湧水層には達しておらず、雨水を導き溜めたと考える。埋め土は上層が暗茶褐土・暗灰粘土に地山粘土ブロックなどが混ざり、人工的に一気に埋め立てられた様相を示す。中層・下層は白灰粘土・炭混じりの黒褐灰粘土などのヘドロで充填されている。上層から１期の瓦器椀・皿・青銅製品などが発見された（図26　37　230　図版５・７)。発見された遺物より、両井戸は同時に機能していたのではなく、井戸３－２がＩ期に、これが廃絶し、埋め戻された後に井戸３－１が掘削されたことがわかる。また、南北溝３－１にはⅠ・Ⅱ期の遺物が含まれていることより、井戸３－２の使用時期は南北溝３－１が機能していた時と同じで、井戸３－１の廃絶時期は南北溝３－１の廃絶期とほぼ同じ頃と考えられる。

井戸３－３は調査区の西隅で発見された。下層は調査区外だったため、完掘することはできなかった。検出面での直径約2.2m、下層の直径は1.2m程度を測る。上層は礫混じりの暗褐粘土で地山粘土ブロックを含み、一気に埋められたようだ。遺物は瓦器の小片のみである。

南北溝３－１の西南に接して大土坑３－３が発見された（図24)。南北約6.5m、東西約5.4mで、深さ約0.5mを測る。掘り底は平たく、いくつかの柱穴が見られた。下層の埋め土は黒褐土・茶褐粘土などで礫や炭と土器などを含む。上層は南北溝３－１と共通する茶褐粘土である。最終的な埋没は南北溝３－１と同じ頃と考えるが、上面には鋳造関連の遺物を大量に含む鋳造土坑３－１・３－２が切り込まれている。発見された遺物はＩ期の瓦器椀・皿、土師器皿・土師質羽釜、東播系すり鉢などがある。

大土坑３－３内には鋳造土坑３－１・３－２がある。鋳造土坑３－１は東西約3.3m、南北は1.5mで深さ約0.3mを、鋳造土坑３－２は東西約2.3m、南北は約1.2mで、深さ約0.3mを測る。両土坑の掘り底は平たく、炭・焼け土が充填され、鋳型片・炉壁片が含まれる。その他、Ⅱ期の瓦器椀・皿、土師器皿などもあった。いずれも、大土坑３－３の埋没過程、あるいは埋没後のほぼ同時期に鋳造関連の作業後に残りカスなどを廃棄し、土坑を形成したと考える（図版７)。

方形区画の東側外、３号棟区の東南隅で掘立柱建物３－１を確認した（図30)。南北が四間で東西は一間以上、柱間は約2.1mを測る。西側に1.4～1.6m間隔で庇、あるいは榱列状の柱穴列が並ぶ。柱穴から遺物は発見されなかった。しかし、上面から少量のＩ期の瓦器椀が発見されており、中世の遺構と考える。掘立柱建物３－１の南側で東西溝３－１を検出した。埋め土は茶褐土で遺物はない。建物に伴う排水溝と推定する。

e．4区の遺構と遺物

住棟建設に伴って行われた埋管工事や道路整備に先立って東道路区の南側を拡張して調査区をもうけ、4区と呼んだ。1号棟区・3号棟区のほぼ中間に位置し、第2次調査区（98－A区）の北西に隣接する。遺構は方形区画の中央を南北に貫く位置にあたる。調査の結果、方形区画の北を画する溝や大土坑、柱穴群などが確認された（図31）。

柱穴群は合計19基あった。大半は調査区の東壁に沿って、直線に並んでいた。柱痕跡や柱根、細かく時期を判別できる遺物を含むものはなかった。

東西溝4－1は調査区の北隅で確認された。北肩は調査区外になる。東道路区では明瞭に北肩を確認できなかったが、土層断面では共通する埋め土である暗茶褐土が確認されており、本来幅8m程度だったと考える。この溝の深さは約0.15mで、東西に続く部分は1・3号棟区で確認されている。

東西溝4－5は幅約8m、深さ0.1mを測る。底面に大土坑4－1と土坑4－5があり、埋め土は暗灰褐土で落ち込み状の地面を整地した痕跡かもしれない。遺物はI期の瓦器椀、土師器などがあった。

東西溝4－4は東西溝4－5の埋没後に切り込まれた溝で幅約0.3m、深さ約0.1mを測る。埋め土は暗褐土で流水の痕跡はなく、遺物もなかった。

東西溝4－7は南北溝4－2の埋没後に切り込まれた溝で幅約0.35m、深さ約0.1mを測る。埋め土は東西溝4－4と共通する暗褐土で、流水の痕跡はなく、遺物もない。溝が埋没したあと、中央に焼土坑4－1が営まれている。

南北溝4－1は全長18m以上、幅約1m、深さ0.2mを測る。やや西にふれ、東西溝4－5を切り、南北ともに調査区外へ続く。埋め土は茶褐粘土で流水の痕跡があり、遺物は少量の瓦器・土師器があった。

南北溝4－2は全長16m以上、幅約0.4m、深さ0.15mを測る。南は南北溝4－1に切られ、北は東西溝4－5に切られる。埋め土は暗灰粘土で流水の痕跡があり、少量の土器を含む。

大土坑4－1は調査区の中央、東西溝4－5の下層で検出された。埋め土は二時期にわたる。当初は灰褐強粘土が約0.05～0.1m程度堆積した後、地山の粘土ブロックを大量に含む茶褐土で埋め立て、その東側にやや深く、新たな掘削が行われている。この土坑の下層は青灰強粘土・暗灰粘土で上層は暗灰褐土になる。帯水の後、ゆっくり干上がったようだ。井戸3－1などと同様に水ための機能があったのだろう。遺物は炉壁片や鋳型片などの鋳造関連遺物、I期の瓦器椀と土師器皿・羽釜などがあった。

土坑4－1は調査区北西隅にある。深さ約0.6mを測り、埋め土は茶褐粘土で遺物はない。

土坑4－5は東西溝4－5下層で発見された。深さ約0.6mを測り、下層の埋め土は地山粘土ブロックを含む灰褐土などで遺物はない。上層は東西溝4－5埋め土が混入しており、埋没時期はほぼ同じと考える。

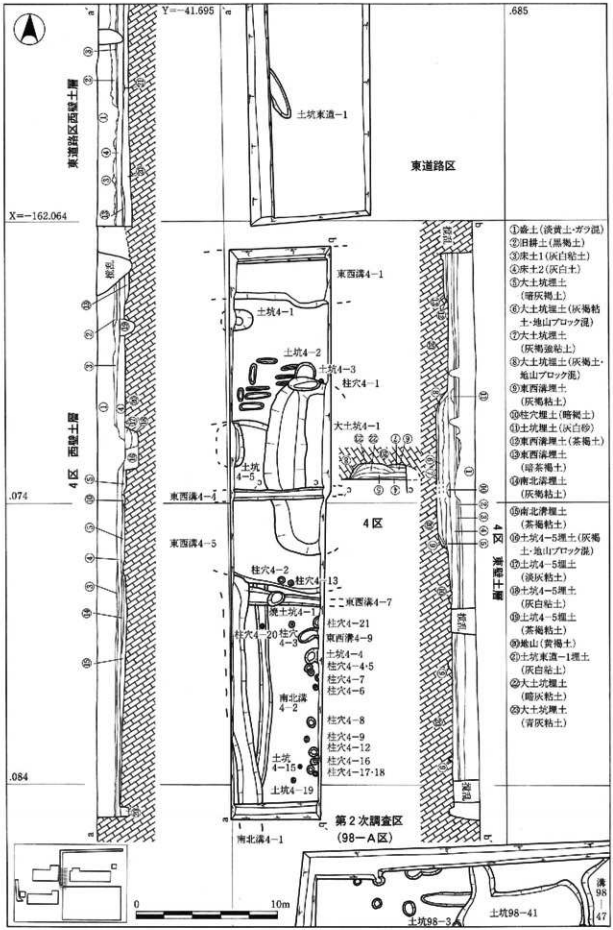


図31　4区中世遺構図（3／400）

f．東設備棟区の遺構と遺物

東設備棟区は3号棟区の北東に位置する（図5）。方形区画から東に50m以上離れる。第2次調査区や3号棟区の調査でも東側は中世遺構が少ない。地山も礫が大量に混じり、遺構密度は低いと予想していた。しかし、合計27基の柱穴と中世土器を大量に含む落ち込み状の遺構を確認した。3号棟区東隅の掘立柱建物3－1とあわせ、この付近に新たな集落の展開が予想される。

柱穴は直径0.2～0.3m、深さ0.15～0.2m程度で茶褐土・淡灰土などで充填され、柱痕跡は見られず、建物をまとめることはできなかったので、柱穴以外の機能があったのかもしれない。

落ち込み東設－1は東西2.5m以上、南北3.2m以上を測る不定形な遺構で、深さ約0.15mを測る（図32）。北側は調査区外へと続く。埋め土は砂利の混じる灰褐土でⅠ期の瓦器椀、土師器などが発見された。

落ち込み東設－2は東西6m以上、南北5m以上を測る不定形な遺構で深さ約0.15mを測る（図32）。西側は調査区外へと続く。埋め土は落ち込み東設－1と共通し、砂利の混じる灰褐土でⅠ期の瓦器椀・瓦器皿、土師器皿・羽釜などが発見された（図33　図版5）。

柱穴が落ち込み状遺構の底面から多数確認されていることから、落ち込み状遺構の埋没時期が遺構群の最終段階でⅠ期の内にあったことがわかる。

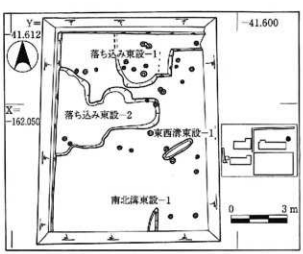


図32　東設備棟区（1／200）

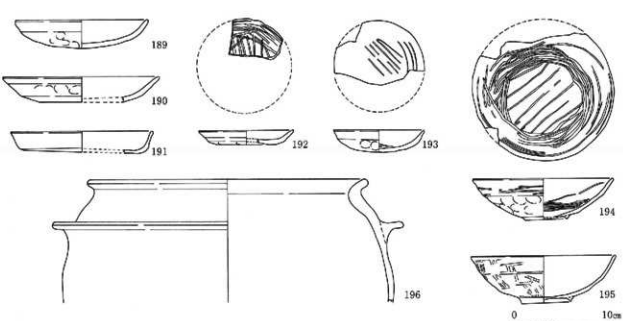


図33　落ち込み東設－2出土土器（1／4）

g．中世の遺物

主に方形区画内の遺構と上面の遺物包含層や周辺から発見された。3号棟区の東隅と東側設備棟区の落ち込み状遺構にも一部見られた。本節では遺物を概観し、その特徴を述べる。

発見遺物は瓦器・土師器・陶磁器などの土器類（図版5・6）、鋳造関連遺物、青銅・鉄・石製品、瓦類に大別できる。土器類は瓦器・土師器が大半で、他に東播系すり鉢、常滑焼大甕、中国製の白磁・青磁などの交易品がある。土器類は16ページで概観したように二型式に大別できる。瓦類は丸瓦・平瓦と道具瓦で、軒瓦はない。

鋳造関連遺物には鋳型（図版7）、フイゴ羽口片、炉壁片、鉄サイがある。その他に青銅製品と銅銭、鉄素材と鉄製品がある（図版7）。石製品には砥石と硯がある（図版7）。

瓦器は椀と皿が大半でこれらが調査区遺物の大半を占める。ひとつは口径14.2～16.2cm、器高は約5～6cm、高台径5.5～6.5cmで、土坑2－4出土（図18）を典型とする（Ⅰ期）。高台はほぼ正円で直径が大きく、しっかりしたつくりで、断面三角形あるいは台形になる。体部の内外面は丁寧に密に磨き、見込みの暗紋は平行線状、斜格子状、らせん状などの変化がある。大半は口縁部外面を幅広にナデ仕上げする和泉型瓦器椀の特徴だが、口縁端部に沈線をもち、胎土が緻密な楠葉型瓦器椀も少量あった。

もうひとつは直径13.5～15.8cm、器高3.5～4cm程度、高台径は3～4cm程度で、井戸3－1・南北溝3－1出土（図27・28）を典型とする（Ⅱ期）。高台は輪状にした粘土ひもを指で押さえて貼り付けただけで、正円になるものが少なく、直径も小さい。器高も低く平椀に近い。体部外面は磨かれず、指押さえの痕跡が明瞭に残るものが大半で、磨いても口縁端部にわずかに施

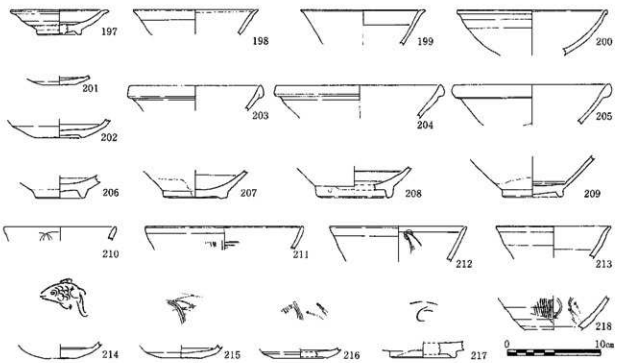


図34　白磁（197～209）と青磁（210～218）（1／4）

されるのみである。見込みの暗紋はほとんど平行線状でらせん状も少量ある。暗紋が明瞭でないものも多い。口縁部外面を幅広にナデ仕上げする和泉型瓦器椀のみ確認でき、他地域の特徴があるものはなかった。

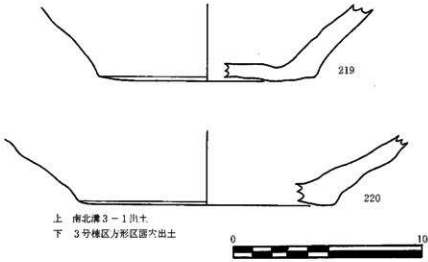


図35　常滑焼大甕（１／２）

瓦器皿も二時期に大別できる。Ⅰ期瓦器椀に共伴するものは概して作りが丁寧で、口径9cm以上、器高２cm程度を測り、口縁部外面のナデによる稜線は明瞭でない。磨きは体部の内外面ともにみられ、見込み暗紋は平行線状に明瞭に施される。井戸３－２出土（図26）を典型とする（Ⅰ期）。一方、Ⅱ期瓦器椀に共伴するものは概してつくりが粗く、口径９cm以下、器高も２cm以下でやや小ぶりとなる。しかし、口縁部外面のナデによる稜線が明瞭で、磨きは体部の内外面ともに簡略される。見込み暗紋は明瞭でないものが多く、平行線状・らせん状がある。井戸３－１出土・南北溝３－１出土（図28）を典型とする（Ⅱ期）。

土師器皿は手づくね形成が大半である。粘土帯の一端に切り込みを入れて円弧状に皿を形成する切り込み円板技法の形成痕跡を残すものもある。小皿は口径８cm～10cm程度の大きさを測り、ほぼ規格的である。その他、直径14.5cm程度の大皿が少量含まれる。胎土の違いによって、明赤褐色系・褐色系・乳白色系の色調に分けられる。搬入品が数多く含まれると考えるよりも、いずれも近隣で生産されたものとみられる。

土師質羽釜は直径約30cm～45cmまで変化に富み、形態は口縁部の形態で二分できる。ひとつはつばの上部から口縁部にかけての立ち上がりが長く、やや内斜、あるいは直立気味にまっすぐに伸ばしながら口縁端部を「く」字形に大きく屈曲させるものである（Ⅰ期）。土坑２－４出土を典型とする（図19）。もうひとつは概して小型が多く、つばの上部が短く、強く内斜する（Ⅱ期）。井戸３－１出土を典型とする（図19）。両者とも口縁端部に丸みをもたせ、厚く仕上げる。つばは長さ３～４cm、厚さ約１cm程度で端部は丸い。体部まで残る破片は少なく、外面をヘラケズリし、内面は指おさえの痕をナデけすか、刷毛で調整する。つばより下の外面は黒く煤ける。

瓦質羽釜は小型品が二点のみ発見された。井戸３－１出土は三足の小片で（図27　134）、南北溝２－８出土は口縁部を内斜させ、端部は屈曲せず、丸く厚くしない（図17　49）。

東播系すり鉢も口縁部形態で二時期に大別できる。ひとつは口縁端部のつまみ上げが弱く、体部にかけてやや丸みをもつ内湾気味のものである（Ⅰ期）。これに対し、口縁端部が上方に引き

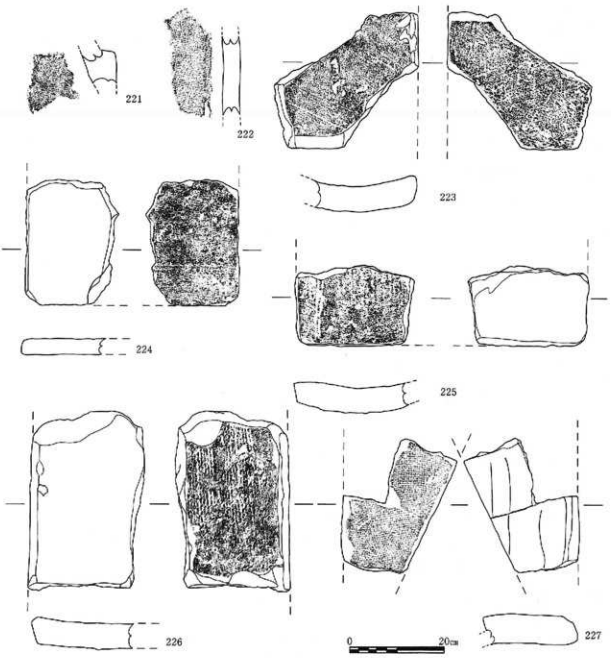


図36　中世の瓦（1／8）

上げられて、尖り気味の断面三角形となり、体部から口縁部にかけて、ラッパ状にやや外反するものがある（Ⅱ期）。

常滑焼は大甕が数個体、小片となって発見されている。外面は光沢のある暗赤褐色、または暗茶褐色で緑黄色の自然釉がかかるものもある。底部径は11.4cmと13.8cmがある。口縁部の破片は発見できなかった。大土坑2－1・南北溝3－1・井戸3－1などで発見されている。Ⅱ期に対応するのだろうか。

中国製陶磁器は白磁・青磁があり、白磁が多い。両者ともに碗と皿のみで、口縁端部が玉縁になる白磁Ⅳ類碗が全体の約1/3を占める。青磁は色調が緑褐色で釉が薄い同安窯系と、主に色調が青緑色で釉が厚い龍泉窯系の破片が発見された。前者は概して、碗高台の作りだしが粗く、外

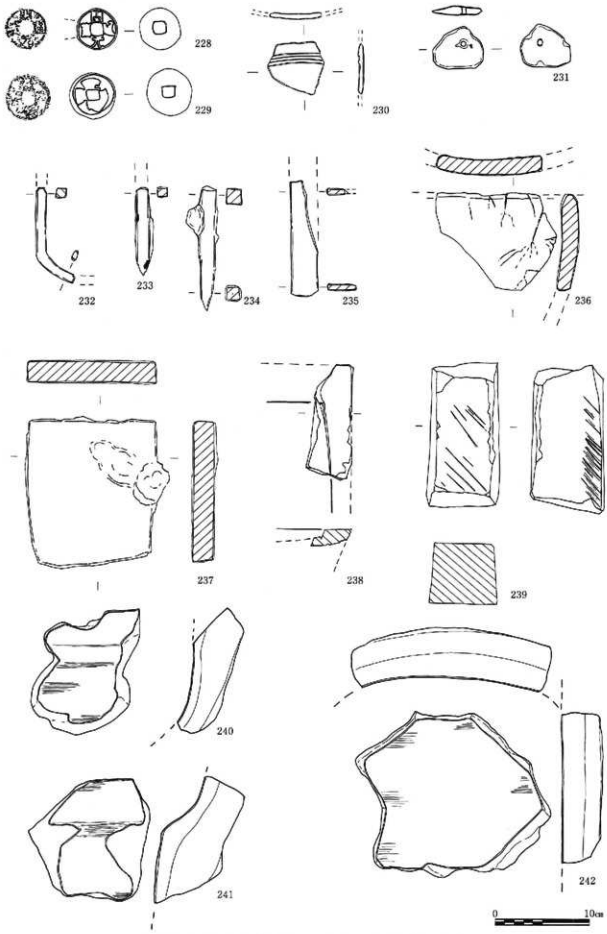


図37　青銅製品・鉄製品・石製品・鋳型（1／4）

面に縦方向の櫛描きを施すものもある（図34　218）。後者は碗高台の作りだしが丁寧で、断面形は整った台形を呈する。また、外面に鏑連弁紋を刻むものが一点のみあった（図34　210）。

瓦は柱穴群の量に対して非常に少なく、軒瓦もなく瓦葺き建物は想定できない。発見遺構は溝や柱穴の底に礎板状に敷かれたものなどである。小破片ばかりで概して平瓦が多く、丸瓦は少ない。平瓦は凸面に縄たたきが明瞭に残るものとなで仕上げされたものがある（図36）。なで消されたものも離れ砂とおもわれる川砂が付着する。凹面は布目が残るものがほとんどで、斜め方向に無数の木挽き痕跡が残る破片もある（図36　223）。丸瓦は玉縁をなし、凸面がなで仕上げされ、凹面に布目が残る（図36　221）。２区の方形区画内などから発見されている。

道具瓦には隅木蓋瓦の可能性がある三角形の破片がある（図36　227）。形状は焼成前にへらで形成され、凸面もへらで丁寧に平滑にされている。凹面は布目が明瞭に残る。厚さは2.8cmを測る。２区の方形区画内から発見された。平瓦には凹凸のない平坦な小片もあり、焼成後に打ち欠き形成されたのし瓦かもしれない（図36　226）。南北溝２－８上面から発見された。

鋳造関連遺物はすべて断片で発見された（図37・38）。形状を復元できるものは少ない。鋳型の断面は粗真土、中真土、肌真土の三層構造である（図37　240～242）。粗真土部分は暗茶褐色か暗赤褐色で、わらを混ぜた痕跡が残り、水分を含むと崩壊する。中真土部分は焼けて灰白色または乳白色で、細かい砂粒を多く含む厚さ１～２cmの部分からなる。肌真土部分は黒色で緻密な胎土による小さなヒビがみられる部分で厚さ１～２㎜である。

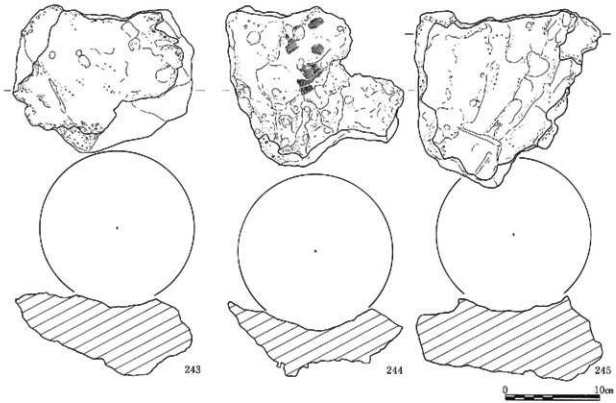


図38　フイゴ羽口（１／４）

製品の形状をあらわす肌真上部分が残るものは小片しかなく、細かい回転痕跡が残るもの、湾曲度合いから直径20～30cm程度の円形の製品を形作ったと考える。また、曲面による段があるものは鉄鍋の縁部をかたどると考える。鋳型は1号棟区の井戸1－1、2号棟区の井戸2－1・大土坑2－1、3号棟区の鋳造土坑3－1・3－2、4区の大土坑4－1などから発見された。

フイゴ羽口片はすべて先端部分の小片で、アメ状になった鉄サイが付着する（図38　243～245）。羽口の内径は4.2cm程度で厚さ3.0cmを測る。2区南北溝2－7などから発見された。羽口と判別できるものは少ないが、同様の形状になる小片はいくつか見つかっている。

炉壁片は小片ばかりで炉の形状のわかるものはない。また、遺構にまとまって発見されることもなく、散在的である。内面にアメ状の鉱サイがからまり、外面は厚みが3～4cm程度の赤褐色または黄褐色の焼きしまった粘土による。鉄サイも小片で少なく、発見は散在的だった。ロクショウの付着するものはなく、確実に銅製品の鋳造に関連するものは確認できなかった。

青銅製品は南北溝1－1と井戸3－2で確認された（図37　230・231　図版7）。南北溝1－1にあった一点は暗赤褐色で中央に穿孔があり、長さ2.7cm、幅2.2cm、厚さ0.5cmを測る。摩滅が激しい。井戸3－1からの発見品は暗灰褐色で表面に錆が覆い、二条のやや湾曲する突帯がある。裏面は肌が粗く剥離しているらしい。長さ3.1cm、幅2.6cm、厚さ0.3cmを測る。後者は製品の一部と思われ、小型梵鐘あるいは鰐口、橋欄干の宝珠飾りなどに類例を求められる。

銅銭は3号棟区の方形区画内遺物包含層から二枚発見された（図37　228・229　図版7）。両方とも方形穴あきの円銭で一枚は直径2.2cm、「開元通宝」の文字がかろうじて読める。もう一枚は文字が読めず、直径2.4cmを測る。両方とも裏面に縁がなく平滑で、表面の外縁も貧弱であり、直径は小さい。舶載銭とは考えにくく、私鋳銭だろう。調査区内で銭を鋳造していた確証はないものの、第1・2次調査では銭が発見されていないことと合わせ、注目できる。

鉄製品には鉄素材・鉄鍋片・釘片・カスガイ片がある。

鉄素材は1号棟区土坑1－30上層から発見された（図37　237）。長辺8.0cm、短辺6.6cmの方形で厚さ約1cmを測る。錆でふくれた部分は素材をたたみ込むように練った痕跡である層状剥離があり、鍛造品とわかる。製品とは考えにくく、鉄製品を鋳造する際の鉄素材と考えた。

鉄鍋片はゆるやかに湾曲し、現存長6.2cm、厚さ約0.7cmを測る（図37　236）。出土してまもなく細かいひびが無数に入り、乾いた砂の塊が崩壊するかのように形を崩した。

これまで、鋳造関連の廃棄土坑では粉状の鉄カスが大量に発見されることがあった。今回調査区でも井戸1－1・井戸2－1・大土坑2－1などにあった（図12・23）。粉状の鉄カスは今回崩壊した後の鉄鍋片に様相が酷似する。製品の破片や鉄塊、スクラップの一部は土中では深層まで錆化しやすく、形状を保って発見されることはまれである。たまたま、土坑などに貯められて崩壊後に移動したり土壌化しなかったものが粉状の鉄カス層になると考えられないだろうか。

釘片は三本発見され、すべて頭部を欠損する（図37　232～234）。井戸3－1上層と3号棟区方形区画内上面から発見された。現存長6.5cm、断面が一辺0.8cmの方形と、現存長4.6cm、断

面が一辺0.5cmの方形と、折れ曲がって現存長5.5cm、断面が一辺0.5cmの方形がある。いずれも、わずかに木質部が残ることから、柱や板などの木材とともに廃棄されていたものだろう。

その他、板状破片があり、カスガイと考えた（図37　235）。現存長6.2cm、幅1.4cmを測る。

石製品は砥石と硯片がある（図37　238・239）。砥石は乳白色の凝灰岩製で中研ぎ用らしいものである。現存長7.6cm、断面が3.2cm×3.6cmの方形になる。長軸の四面が平滑にされており、各面がやや内湾し、斜め方向に無数の使用痕跡がある。南北溝３－１から発見された。

硯片は暗緑黒色の粘板岩製で緑部分と海部分の一部が残る小片である。現存長6.1cm、幅2.2cmを測る。裏面は剥離して、厚みなどはわからない。井戸３－２から発見された。

h．和泉型瓦器椀の特殊な製作技法をめぐって

今回見つかった瓦器椀の外面に、二本を一組とした凸線で籠目状の痕跡が写し出されたものが多数あった（写真）。この痕跡は外面調整の指頭圧痕上からついたように見える。Ⅰ・Ⅱ期の瓦器椀ともに見られ、これまでの製作技法中に解明されていないため、改めて検討する。

まず、痕跡がどの製作段階で写し出されたか検討したい。瓦器椀は型作り成形のため、内型上で粘土紐巻き上げなどによって成形され、指頭圧痕が外面に残る。この後、半乾き状態で型からはずされ、内外面のミガキ、もしくはナデ仕上げと口縁部や高台の仕上げが行われる。

外面に残された凸線は上からミガキが重なる部分があり、凸線がとぎれるところがある。したがって、ミガキの前段階につけられた痕跡だとわかる。そして、指頭圧痕との関係では指頭圧痕にはつぶされておらず、器面の成形段階の後、調整段階の前に痕跡がついたことがわかる。

次に何によってこの痕跡がついたのかを検討する。まず、タタキ技法であれば、連続性や原体の範囲を確認できるが、凸線はほぼ器壁を全周するものもあり、痕跡に規則性はない。凸線の痕跡であることから、器壁上に何かを押し当てたとは考えにくいのだが、面的に籠目状の跡がつくような椀状のものであれば、原体の隙間が凸線になって現れる可能性はある。つまり、原体は編み籠を想定できる。しかし、編み目とすれば凸線の間隔は広く、形状を復元するには至らなかった。このような痕跡がつけられた理由としては、内面の暗紋を施すときに、直接椀を持たずに、編み籠のようなもので固定する役目があったのではないだろうか。発見された痕跡は二時期に渡る瓦器椀で20個体以上に上ることから、技法としての普遍性を読み取れる可能性がある。

（写真）瓦器外面に残る凸線による（編み籠？）痕跡
（図28　148参照）

3．その他の遺構と遺物

a．道路区の調査

1・2号棟区の西側と3号棟区の西側・北側の外周道路部分、延長約160mにおいて、幅3mの調査区を設定して擁壁・埋管工事に先立ってトレンチ調査を行った（図5・6）。以上の部分については方形区画外で中世の遺構は確認できなかった。主な遺構は地山に東西・南北方向で短く刻まれた鋤溝とわだち跡である。その他、遺物がなく、時期不明の斜行溝もある。

わだち跡は北道路区と東道路区で主に南東から北西方向に発見された（図39）。折り重なってみつかった部分と離れて単独で発見された部分がある。左右わだちの間隔は約1.3～1.5mで1・2次調査で発見されていたものと共通する。刻まれた溝の幅は約3～5cm程度、深さも3～5cm程度である。埋め土は上層の灰白土で遺物はない。わだち跡は3号棟区の方形区画内でもいくつか確認されているが、双方とも地山に切り込まれ、よく似た埋め土であるため、層位的に新旧が区別できた部分はない。しかし、一部に柱穴群を切り込んでわだち跡が形成された部分があり、中世以降の遺構と考える。これまでの調査では古墳時代後期の畝溝群の上にわだち跡が切り合って、これらが埋没する層の上から中世遺構群が形成されたと判明した個所があり、矛盾が生じている。以上、わだちの形成時期については問題を残す結果となった。

あわせて、余部遺跡のわだち跡は広範な範囲で発見されており、道路や溝などに進行方向の規制を受けていた様子はない。また、車輪跡のみ大地に残り、それを引いていた牛馬や人間の足跡がわかる部分もない。つまり、たまたま、地表面がぬかるんでいたところにわだちが残されたのでもなさそうで形成の状況復元が困難である。

今回調査区でわだち跡は3号棟区の西側とその北側の道路区部分のみ、不規則に行き交うように発見されており、1・2号棟区などにはなかった。わだちの進行方向北側には条里に添った方形の皿池（前ヶ池）がある。この池を掘削した土を付近に整地した際、荷車のみ荷重が重くかかり、痕跡が残されたのではないだろうか。

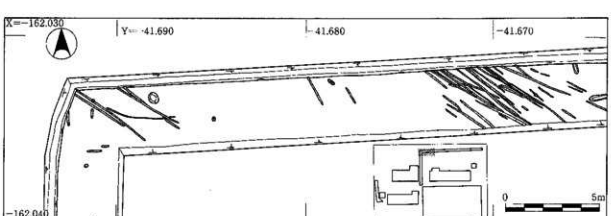


図39　北道路区のわだち跡（1／200）

b．２号棟区の近世遺構

中世遺構面上面の遺物包含層は府営住宅造営以前の水田床土である。付近の水田化がいつごろだったのかはよくわからないが、遺物包含層には少量の江戸時代陶磁器が含まれており、時期を示唆するものである。広範な調査にもかかわらず、これまで近世の顕著な遺構は確認されていない。今回調査では、２号棟区北東で４基の井戸が確認され、そのうちの２基は近世の遺物が含まれていた。

井戸２－２は直径約1.4mを測る素掘り井戸である（図23）。掘り底は検出面から約3.5 mで湧水層に達しており、ガマになっている。埋め土は上層が灰褐砂に地山粘土ブロックなどが混ざり、人工的に埋め立てられた様相を示す。中層・下層は青白強粘土・青灰強粘土などのヘドロで充填されている。上層から少量の肥前磁器コンニャク印判紋碗・堺焼すり鉢片が発見された。

井戸２－３は井戸２－２の東に位置し、直径約１m、深さ0.6mを測る素掘り井戸で、湧水層に達していない。掘削途中で放棄されたものかもしれない。埋め土は地山粘土ブロックを大量に含む灰褐土でコンテナ１箱分の瓦と17～18世紀初の唐津焼呉器手碗（図40　246）、肥前磁器片（図40　247・248）が確認された。瓦には巴紋軒丸瓦が二点、道具瓦の破片が一点含まれる。

c．周辺道路部分の立会調査

２号棟区の東側と南側、１号棟区の北側で埋管切り替え工事があり、既存の埋管などで遺構面が失われている可能性が高かったため、立会調査を実施した（図39）。大半の部分で遺構面は確認できなかった。２号棟区の南側では４基の柱穴が確認でき、中世遺構群が広がると考える。

また、２号棟区の西側で南北に10m以上続く溝の肩を検出した。この付近は堺市と美原町の旧境界にあたり、境界を示す近世の水路跡だった可能性もある。埋め土は砂利の混じる暗灰粘土で遺物は発見されなかった。

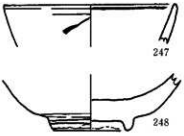


図40　井戸２－３出土陶磁器（１／２）

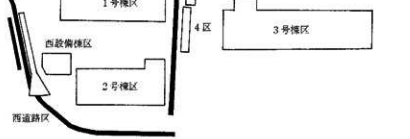


図41　立会調査位置図（黒印）

第Ⅲ章　まとめと展望

1．中世以前の遺構と遺物

余部遺跡は阪和自動車道路建設に先立つ発掘調査を皮切りに三次にわたる府営住宅建て替えに伴う調査など、大規模に遺跡とその周辺の詳細を知る機会を得た。今回の調査はその最終段階であり、これまでの調査成果とあわせて遺跡の実像を概観したい。

中世までの土地利用は散在的で弥生時代までに狩猟などで訪れた者を除き定住の痕跡は低かったことがわかる。それは古墳時代後期まで続き、灌漑が十分発達せずに水田化が遅れ、かわりに一時的な畑作痕跡が垣間見れた。しかし、狭山池造営をきっかけに一変したのかもしれない。畑作は放棄されたようで、水田開発が活発化したのだろう。余部遺跡南端では飛鳥時代の集落跡も発見されており、今後は奈良～平安時代の居住域の発見に期待がよせられる。このような状況のもとに水田化が進み、古代から中世にかけては荘園制の社会に組み込まれたと考える。

2．中世の遺構と遺物

余部遺跡周辺には中世、河内鍋の生産や東大寺大仏の修復で名高い鋳造技術集団、河内鋳物師が活躍していたことが、文献史料や金石文などから知られる。遺跡の東では堺市日置荘遺跡が、西でも太井遺跡・真福寺遺跡において、中世の鋳造に関する遺構・遺物が大量に発見されており、河内鋳物師の活動を垣間見ることができていた。

第１・２次調査でも鎌倉時代を中心とした中世の鋳造関連遺構・遺物が発見され、それを管理していた人々の居住域と考える方形の区画で囲まれた屋敷跡の全容が明らかとなっていた。調査地周辺は日置荘という地名が残り、興福寺荘園として土地区画されていたことが知られる。屋敷地は荘園に関する有力者が荘園管理と共に鋳物師集団を統括していたものと結論づけられた（註１）。私も以前に、河内鋳物師に関連する遺構として松原市岡遺跡において、鋳造関連遺構と大型建物がセット関係で存在することを調査・確認し、広隆寺の松原荘と河内鋳物師の関係を導いた。

ところが、今回の発掘調査でも鋳造遺構群とそれを含み込む新たな方形区画が発見された。方形区画は東西65m、南北30～45m規模の浅い区画溝に囲まれ、内部に遺構が密集していた。ちなみに地籍には「島垣内」という小字名が残り、まさに小規模な屋敷地を連想させる。これらは河内鋳物師の盛衰と対応するかのように鎌倉時代を通じて発展し、南北朝・室町時代には廃絶している。

しかし、今回の調査でみつかった方形区画の内部は、これまでと少し様相が異なる。区画内で鋳造痕跡が見られ、突出した大型の建物や瓦葺き建物は発見されなかったのである。領主層の建物が近接していくつも営まれるとは考えにくく、したがって、鋳物師集団の作業場と居住地を兼

ね備えた施設であると考えた。

ところで、中世の方形区画は溝・堀・土塁などで四角く区画した屋敷地を示す。古くは「堀ノ内」・「土居」などと呼ばれ、武士の城館と考えられてきた。しかし、調査例をよく検討すると、防御施設を示す程、方形区画は堅牢でないこと、絵巻物に描かれた屋敷も柴垣や塀で囲われただけのものばかりで、その機能は疑問視されるようになっている（註2）。

今回の発見でも区画溝は浅く整然としない。以上より、工人の居住区や工房が区画されていたと考えた。そして、このような工房の鋳造工人は領主に庇護された伝統的な工人集団と趣を異にする、という推論も示されている。

余部遺跡の場合、これまでに小規模な鋳造工房群が南北に細長く発見され、あたかも道の両側に町家が展開するかのごとく連なることが鋤柄俊夫氏によって指摘されている（註3）。その連なりは付近に広がる条里地割にも対応しており、街路があったようだ（註4）。さらに鋤柄氏は余部遺跡の町屋的な工房は新たに編成された廻船鋳物師や左方鋳物師のような遍歴の集団と読み説いている。

周辺の遺構からは青磁・白磁などの中国陶磁・東播磨系すり鉢・常滑焼大甕などがいくつも発見されており、交易によってこれらの品々が流通していたこともわかる。その道すがら、鉄や銅の素材が北部九州や中国地方などから運ばれ、鉄鍋・鉄釜などの製品となって全国に拡散したものと思われる。

確かに、これまで発見されている河内鋳物師の鋳造遺跡は広域に及び、概して、小規模集団が分散していた様相だ。一くくりにできる様な統制された集団とは思えない。それは右方鋳物師、左方鋳物師をはじめ、丹治・広階・土師・草部・平・大春日・布忍・船・山川姓などの、多様な系譜をもつ鋳物師集団に分かれていることからもわかる。このような生産地域に素材が一括してもたらされたとしても、うまく分配出来たとは思えない。仕上がった製品も集約して流通管理されていたとは思えず、それは各遺跡の消長がずれることからも関連性の薄さを示している。

以上のように考えた場合、鋳造工人の中には荘園制という土地にしばられながら、農業生産と兼業していた人達と、そうでない人達の残した遺構が存在するはずである。さらに、鋳物師の周辺に交易・運搬・行商といった仲介役などを生業とする人達も大勢いたのではないかと考える。そして、建物群や方形区画には農村集落の居住形態とは異なり、市のように短期間だけ利用されたり、鋳込み作業などの時だけたくさん人が寝起きした鋳造に関する協業のキャンプもあったのではないかと想定する。

鋳造遺構の一角からは大量の瓦器椀が完形のまま捨てられていたり、鉄鍋・鉄釜の生産地であるにもかかわらずたくさんの土製羽釜が発見される。鋳造遺跡の建物群がすべて工房だったり、工人居住区と考える必要はないだろう。今回発見された青銅製品の小片と鉄鍋破片は、単に鋳造欠陥の品が破片となって廃棄されただけなのだろうか。むしろ、鉄素材と共にクズ鉄・クズ銅を商品流通させたり、中古品・再利用品などの修理を生業とする工人達がいたことを示すものでは

ないかと考える。

近年行われた都市と職能民を議題にしたシンポジウムの冒頭、網野善彦氏は以下のような問題提起をしている（註5）。

「・・・田畠を持たないことは貧困である。というマイナスの評価をすることは、牢固として日本人の社会、あるいは歴史研究者の中に浸透している見方であり、田畠を持っていないが故に江戸時代の水呑みを「貧農」と捉えるのは当然だと、これまでは考えられていました。同じく、田畠を持たず在家のみしか所有していない人は貧しいという捉え方が前提であったから・・・それはたいへん偏った見方なのです。・・・」

まさにそのとおりであり、田畠を持たない中世の鋳物師集団は土地にしばられない分、自由に交易したり、各種の労働にも従事し、発展していったのだろう。公事や租税の減免に尽力する必要もなかった。

しかし、このような鋳物師とそれに付随する集団も時代の変化とともに中世後半には南河内を離れ、鋳物師は各地を拠点とする地鋳物師に変質する。そして、近世の城下や都市では新たな系譜と伝統をつくり出す。中世の系統的な梵鐘から近世の個性豊かな梵鐘への変化はこのような変遷の上に位置づけられるのだろう（註6）。

また、発見された遺構・遺物の大半は鉄鋳物に関するものだったが、南北溝1－1・井戸3－2で鎌倉時代初頭の土器と共に発見された二点の青銅製品は分析結果から素材ではなく、スクラップ銅などの一部と考えられ、鋳銅作業を予想させるものとなった。これまで、河内鋳物師関連の鋳造遺構は鉄製品にかかわるものばかりで、文献や作品の銘文に知られる鋳銅の実態は遺跡から明確にされていなかった。鋳銅工人と鋳鉄工人は身分差から同じ場所に工房はない、という考えもあった。今回、両者が発見されたことにより河内鋳物師の中には鉄と銅の兼業で鋳造活動を行っていた者がいたという可能性を導いた（註7）。

3．河内鋳物師集落の実態と調査の展望

ところで、今回の調査でも遺構や鋳造関連遺物から鋳造の実態を復元できる良好な資料は得られなかった。一体、生産が工人ごとに独立的だったのか、鋳型づくり・鋳込み・製品仕上げなどが連携して集約的に行われたのか、よくわからない。鋳造関連遺物の発見から鋳造活動の継続性や生産規模の大小を復元することもできない。なぜならば、各地で発見される鋳造遺跡と比べ、河内鋳物師の集落では鋳造関連遺物があまり多く発見されないことにある。例えば、福岡県大宰府の鋳物師集落や、埼玉県金井遺跡などで発見された物部鋳物師集落と比較した場合、遺構の規模や遺物量ともに少ないことが指摘されている（註8）。文献史料での鋳物師の活躍に対し、遺跡から活発な鋳造の実態が読み取りにくいという特徴がある。鋳造による廃棄品は効率よく再利用される仕組みが整っていたと考えるべきかもしれない。

そして、地山を削り込んで装置を据え置いて鋳造する場合はむしろまれで、地表に痕跡を残さ

ないような作業場で鋳造する場合が通常であったのかもしれない。もしそうだとすれば、たまたま遺構に残された状況がどれだけ普遍性を持つものか吟味する必要もあるだろう。

さらに、今回は密集して多数の柱穴群が発見されたにもかかわらず、建物の復元はほとんどできなかった。このことは建物構造が非常に複雑で、例えば作業空間と居住空間を作り出すために複雑なつくりだったと考えることもできる。

あるいは前述したように、鋳造にかかわる協業のキャンプ跡や鋳物師の周辺に交易・運搬・行商といった仲介役などを生業とする人達が活動していたとすれば、一軒一軒の建物は大半が簡易的・仮設的なものだったり、屋台のように使用と移動をくり返していたのかもしれない。この場合、建物群は住居と呼べる位置付けが可能かどうか、問い直さなければならない。

最後に、発見された遺物から中世集落の実態を展望したい。遺物の大半は瓦器椀・皿、土師器皿である。腐食して失われた木器や漆器を考慮しても、古代に比べ食器器種の少なさを感じる。瓦器・土師器に大・中・小の多様性はない。おかずの品数や料理の多様性、老若男女の構成比などが反映されていないのである。中世食卓風景の単調さを垣間見れる。加えて、調理器具も土製羽釜とすり鉢に限られる。ただし、瓦器椀や土師器皿に混ざって、青磁・白磁の碗と皿が多数発見されている。これらは分布が偏重せず、土器と混在して発見されることから、使用者の違いとは考えにくい。食卓風景の単調さにひきかえ、安価な焼き物食器と高級な中国陶磁がどのように使い分けられていたのか興味が引かれる。

そして、鉄製の鍋・釜を生産していた工人集落であるという特殊性があるにもかかわらず、煮沸具としての土師質羽釜、瓦質羽釜の使用は普遍的なものである。前述のように土製・金属製の煮沸具を使い分けれるような料理や食器に多様性をうかがえない。鉄鍋・釜を生産していた工人身分やくらしぶりは今後注目すべき課題だと考える。

(註)

1 小浜 成 2002『余部遺跡』 大阪府教育委員会
2 橋口定志 1991「方形館はいかに成立するのか」『争点日本の歴史』4 新人物往来社
3 勅使河原彰 2002「京の鋳物師」『都市と職能民』 中世都市研究会編 新人物往来社
4 阪田育功 1998「丹上遺跡周辺の古道と地割」『丹上遺跡』 (財)大阪府文化財センター
5 網野善彦 2001「都市と職能民」『都市と職能民』 中世都市研究会編 新人物往来社
6 杉山 洋 1995『日本の美術』355 梵鐘 至文堂
7 西川寿勝・渡辺晴香・小浜成 2002「河内鋳物師の鋳造遺構と中世の鋼・鉄素業工人について」『日本考古学協会第68回総会研究発表要旨』 日本考古学協会
西川寿勝 2002「発掘された河内鋳物師の梵鐘片」『梵鐘』14 日本古鐘研究会
8 鋳造遺跡研究会 2001『鋳造遺跡研究資料』特集 河内鋳物師のなぞにせまる
なお、討論記録は同研究会刊行の『鋳造遺跡研究資料』2002に掲載されている。

付載　余部遺跡出土青銅製品の蛍光X線分析成果について

内田俊秀*
蒜田真友子**

1．はじめに

余部遺跡は中世に活動していた河内鋳物師の本拠地であることが知られ、これまでの調査では鉄鍋・鉄釜などを製作した鋳造関連遺構や鋳型などの遺物が発見されている。河内鋳物師は東大寺大仏の修復や鎌倉新仏教によって流行した禅宗寺院の仏具・梵鐘などを製作していたことが文献史料や製品に残る金石文から知られている。しかし、これまでに発見された鋳造遺構は鉄製品の鋳造が大半で、明確に銅製品を製作していた痕跡は確認されていなかった。

大阪府教育委員会による余部遺跡第３次調査では鎌倉時代遺構面から青銅製品破片２点と銅銭２点が発見された。青銅製品破片はゆるやかに湾曲する二条の突帯や小孔があり、不良品の梵鐘、あるいは製品破片である可能性が指摘され、新聞・雑誌などでも取りあげられた。一部の成果については日本考古学協会で詳細に研究発表され、注目を集めている。

また、同時に発見された２点の銅銭は中国宋銭とも考えられるが非常に鋳上りが悪く、表裏面の外縁に明確な段がない。ひとつは「開元通寶」と読め、わが国で踏み返し鋳造された模鋳銭とも考えられる。このような銅銭と銭鋳型は堺環濠都市遺跡・平安京左京八条の鋳造工房・鎌倉遺跡群などからも発見されており、中世の鋳物集団の活動実態を考える上で興味深い。

小論は以上遺物について、蛍光X線分析によって成分分析を行い、資料解釈の一助とするものである。

2．分析資料の年代

発見された資料は便宜的に青銅製品ａ・ｂ、銅銭ａ・ｂと呼ぶ。いずれも、緑色系の錆付着し鋳肌面は粗い。特に、銅銭ｂは錆が厚く、表層の分析では地金の成分を把握することが困難と判断し、分析を断念した（図２）。

青銅製品ａは鋳造工房や建物群に程近い井戸３－２の埋め土上層から発見された。井戸の廃絶による埋め戻しと同時に、土器類などと青銅製品ａが投棄された状態で見つかった。青銅製品ｂは南北溝１－１下層埋め土出土で、南北溝１－１は鋳造工房や建物群を区画する素掘り溝で検出された。下層は少量の土器などを含む自然堆積の粘土が、上層は人為的な堆積土である（図１）。

青銅製品ａ・ｂは鎌倉時代初頭～前期頃の瓦器椀など共と検出されており、廃棄はほぼ同時期だろう。特に、井戸３－２の廃絶後、しばらくして井戸３－１が廃絶したようである。そこからは、やや時代のくだった鎌倉時代中期にかけての大量の瓦器椀などが発見された。方形区画内の鋳造工房や建物群はこの頃に廃絶すると考えられている。銅銭ａ・ｂは上記の方形区画内の遺物包含層から発見されており、鎌倉時代初頭～中期の遺物であろう。

3．蛍光X線分析法および分析の方法について

物質にX線を照射したときに発生する、元素に固有な波長の特性X線を蛍光X線という。X線照射により、原子の内殻電子がとび出し、この空位に外殻原子が遷移すると、二つの状態間のエネルギー差が特性X線として放射される。蛍光X線の波長は元素により決まっている。蛍光X線分析法はこの特性を利用して、蛍光X線の波長やエネルギーの強度から、物質に含まれる元素の種類や含有量を調査する方法である。蛍光X線分析法には、エネルギーを測定するエネルギー分散型と波長を測定する波長分散型がある。

蛍光X線分析法は非破壊分析であり、短時間で多元素を同時に測定することが可能なため、青銅器、鉄器等の古代金属器の組成、土器・陶磁器の分析にも広く用いられ、特に須恵器では、示標となる特定の元素の検出パターンの比較により、産地分析にも応用されて成果をあげている。今回の調査では、京都造形芸術大学にあるエネルギー分散型蛍光X線分析装置（株式会社テクノス社製　TREX640s）を使用し、余部遺跡から出土した青銅製品ａ・ｂ、銅銭ａの分析を2003年1月24日（金）に行った。

測定条件は電圧40kV、電流0.50mAに設定し、コリメータ0.30㎜、測定時間を100secとし、各試料につき2ヶ所ずつ測定を行った。

4．分析結果

分析の結果、青銅製品ａの成分は銅約99％、鉛約1％で、鉛を若干含んだ銅であることが判明した。

青銅製品ｂの測定では、1回目は遺物表面を測定した。その結果、銅約98％、鉛約2％であった。2回目の測定においては、測定箇所表面の錆部分を発掘担当者の許可のもと、エメリー紙で部分的に研摩し、光沢のある金属部分を露出させ、分析にかけた結果、銅約87％、鉛約13％であった（図4）。

1回目の測定で銅の含有量が高い結果となったのは、土中に埋没している間に銅銭の表面に錆が発生し、その錆が銅を主成分として形成された結果と考えられる。青銅製品ｂは測定結果にちがいが生じたが、青銅製品ａと同様、銅を主成分とし若干の鉛を含有していることがわかった。

以上のことから、青銅製品ａ・ｂともに鉛が検出されており、他の元素をほとんど含んでいなかったため、原料としての粗銅の破片などではなく、粗銅を精練し、製品として調合された材質である可能性は高い。その理由として、銅に鉛を混ぜることにより、融点を低くすることが可能となるだけでなく、溶融湯の流動性も増し、型へのなじみをよくする働きを持つなど、銅を扱いやすくすることができるからである。また、硬度を上げる効果もある。このように多くの利点があるため、銅製品の作製に鉛を入れることは鋳造の技術としてよく用いられていたものである。

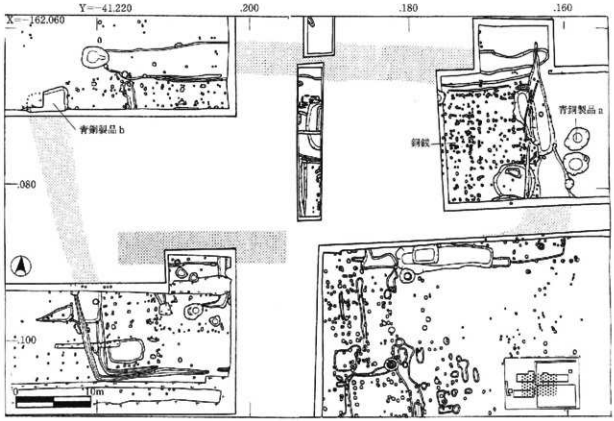
この分析結果では、青銅製品の組成によく見られる錫が検出されなかった。青銅製品では、銅に錫が含有されているものが多い。また、錫が含まれていなくても、時代によっては砒素などが

検出されることもあるが、今回の分析においては、銅と鉛以外は検出されなかった。また、青銅製品ａ・ｂの表面を観察すると、製品としては鋳肌が粗く、鋳上りも悪いため、鋳造欠陥品の破片の可能性もあるのではないかと考えられる。

銅銭の分析結果からは、銅、鉛に微量の錫の含有が見られる（図４）。銅に対し、鉛の含有率が高く、銭としての質は悪いといえる。この銅銭の組成は堺環濠都市遺跡などで発見されている(Cu-Pb-Sn) 型と共通しているが、舶載品か国産の模鋳銭かは不明である。今回の資料は表面の劣化が著しく、表面が錆で覆われていたため、分析結果は、地金の組成を明らかにするにはいたらなかった。今後、微量元素なども定量できる資料が発見されることを期待したい。

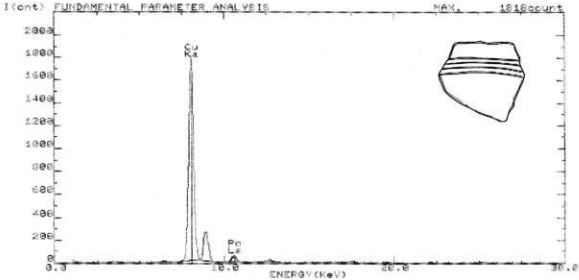
＊　（京都造形芸術大学芸術学部教授）

＊＊（京都造形芸術大学芸術学部副手）

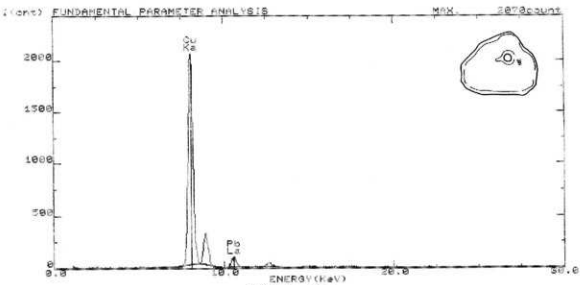


（図１）分析試料出土地点（１／1000）

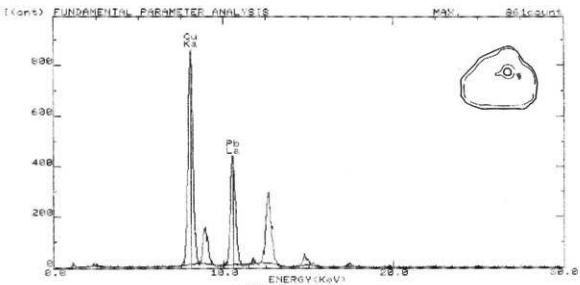
（図２）分析試料（４／５）



青銅製品a 計測1

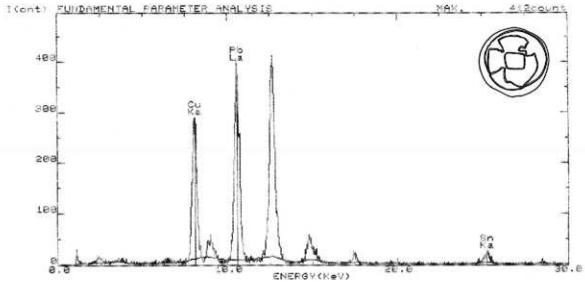


青銅製品b 計測1

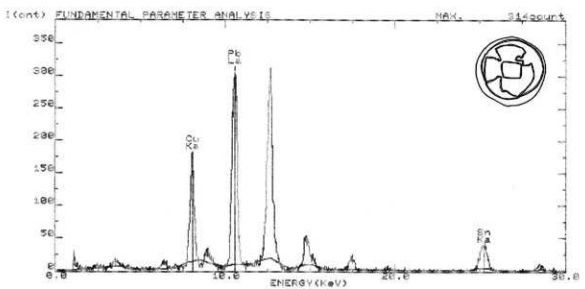


青銅製品b 計測2

（図3）分析値表（1）



銅銭a　計測1



銅銭a　計測2

資料名		分析項目	銅（Cu）	鉛（Pb）	錫（Sn）
青銅製品a（B3-2出土）	計測1	分析値（wt%）	98.966	1.034	—
		積分強度（cps）	124.47	3.60	—
青銅製品a（B3-2出土）	計測2	分析値（wt%）	98.836	1.064	—
		積分強度（cps）			—
青銅製品b（南北溝1-1出土）	計測1	分析値（wt%）	98.361	1.639	—
		積分強度（cps）	142.78	5.64	—
青銅製品b（南北溝1-1出土）	計測2	分析値（wt%）	86.613	13.387	—
		積分強度（cps）	60.35	30.35	—
銅銭a（3号墳包含層出土）	計測1	分析値（wt%）	72.543	27.423	0.035
		積分強度（cps）	18.70	28.74	1.80
銅銭a（3号墳包含層出土）	計測2	分析値（wt%）	64.938	21.74	0.131
		積分強度（cps）	9.96	34.931	3.95

分析成果表

（図4）分析値表（2）

挿図番号	図版番号	実測番号	地区	遺構番号	器種	残存	挿図番号	図版番号	実測番号	地区	遺構番号	器種	残存
1	4	255	3号横	南北溝3－1	石鏃	△	63	5	31	2号横	土坑2－4	瓦器椀	○
2	4	203	西設備様	土坑西設－1	石鏃	△	64	5	97	2号横	土坑2－4	瓦器椀	○
3	4	204	3号横	東西溝3－2	石鏃	△	65	5	30	2号横	土坑2－4	瓦器椀	○
4	4	206	3号横	南北溝3－22	土師器小皿	△	66	5	94	2号横	土坑2－4	瓦器椀	○
5	4	185	3号横	灰白土層	土師器高坏	△	67	5	27	2号横	土坑2－4	瓦器椀	○
6	4	184	3号横	井戸3　1	土師器高坏	△	68	5	50	2号横	土坑2－4	瓦器皿	○
7	4	75	2号横	東西溝2　5	土師器高坏	△	69	5	52	2号横	土坑2－4	瓦器皿	○
8	4	180	3号横	南北溝3－1	須恵器坏蓋	△	70	5	24	2号横	土坑2－4	土師器皿	△
9	4	178	3号横	溝遺上坑3－1	須恵器坏	△	71	5	53	2号横	土坑2－4	土師器皿	○
10	4	174	3号横	井戸3－1	須恵器坏	△	72	5	54	2号横	土坑2－4	土師器皿	○
11	4	187	3号横	灰白土層	須恵器器台	●	73	5	56	2号横	土坑2－4	土師器皿	○
12	4	183	3号横	井戸3－1	土師器皿	△	74	5	284	2号横	土坑2－4	土師器皿	○
13	4	179	3号横	南北溝3－1	須恵器坏蓋	△	75	5	55	2号横	土坑2－4	土師器皿	○
14	4	177	東遺路	灰白土層	須恵器壺	△	76	5	25	2号横	土坑2－4	土師器台付皿	△
15	4	181	3号横	灰白土層	須恵器甕	△	77	5	22	2号横	土坑2－4	土師質羽釜	△
16	4	281	1号横	東西溝1－5	須恵器提瓶壺	△	78	5	23	2号横	土坑2－4	土師質羽釜	△
17	4	176	3号横	井戸3－1	須恵器甕	△	79	—	229	2号横	南北溝2－7	瓦器皿	△
18	4	175	3号横	灰白土層	須恵器甕	△	80	—	332	2号横	南北溝2－7	瓦器椀	△
19	4	194	3号横	井戸3－1	磚	△	81	—	232	2号横	南北溝2－7	瓦器椀	△
20	4	197	3号横	井戸3－1	軒平瓦	△	82	—	230	2号横	南北溝2－7	土師器皿	△
21	4	311	3号横	井戸3－1	銅合せ石帯	△	83	—	231	2号横	南北溝2－7	瓦器椀	△
22	—	330	1号横	東西溝1　5	土師器皿	△	84	—	290	2号横	大土坑2－1	土師器皿	△
23	—	329	1号横	東西溝1－5	瓦器皿	△	85	—	307	2号横	大土坑2－1	瓦器皿	△
24	—	326	1号横	東西溝1－5	瓦器椀	△	86	—	289	2号横	大土坑2－1	土師器皿	△
25	—	327	1号横	東西溝1－5	瓦器椀	△	87	—	254	2号横	大土坑2－1	瓦器椀	△
26	—	214	1号横	井戸1－1	土師器皿	△	88	—	267	2号横	大土坑2－1	瓦器台付皿	△
27	—	273	1号横	井戸1－1	瓦器椀	△	89	—	246	2号横	大土坑2－1	土錘	△
28	—	275	1号横	井戸1－1	瓦器椀	△	90	—	249	2号横	大土坑2　1	東播系すり鉢	△
29	—	304	1号横	南北溝1－1	瓦器椀	△	91	—	247	2号横	大土坑2　1	土師質羽釜	△
30	—	303	1号横	南北溝1－1	瓦器椀	△	92	—	248	2号横	大土坑2－1	常滑焼甕	△
31	—	305	1号横	南北溝1－1	瓦器椀	△	93	—	208	2号横	井戸2－1	土師器皿	△
32	—	228	2号横	南北溝2－5	瓦器皿	△	94	—	240	2号横	井戸2－1	瓦器皿	△
33	—	227	2号横	南北溝2－5	瓦器皿	△	95	—	239	2号横	井戸2－1	瓦器皿	△
34	—	192	2号横	南北溝2－5	瓦器椀	△	96	—	233	2号横	井戸2－1	瓦器皿	△
35	—	224	2号横	南北溝2　5	瓦器椀	△	97	—	237	2号横	井戸2－1	瓦器皿	△
36	—	225	2号横	南北溝2－5	土師質羽釜	△	98	—	238	2号横	井戸2－1	瓦器皿	△
37	—	205	2号横	南北溝2－5	東播系すり鉢	△	99	—	245	2号横	井戸2－1	瓦器椀	△
38	—	217	2号横	南北溝2－8	瓦器皿	△	100	—	280	2号横	井戸2－1	瓦器椀	△
39		209	2号横	南北溝2－8	瓦器皿	△	101	—	236	2号横	井戸2－1	瓦器椀	△
40		213	2号横	南北溝2－8	土師器皿	△	102	—	235	2号横	井戸2－1	瓦器椀	△
41	—	216	2号横	南北溝2－8	土師器皿	△	103	—	242	2号横	井戸2－1	土師質羽釜	△
42	—	215	2号横	南北溝2－8	土師器皿	△	104	—	244	2号横	井戸2　1	土師質羽釜	△
43	—	220	2号横	南北溝2－8	瓦器皿	△	105	—	241	2号横	井戸2　1	東播系すり鉢	△
44	—	274	2号横	南北溝2－8	土師器皿	△	106	—	193	2号横	井戸2－1	東播系すり鉢	△
45	—	312	2号横	南北溝2－8	土師器皿	△	107	—	188	2号横	井戸2－1	山茶碗	△
46	—	198	2号横	南北溝2－8	土師器台付皿	△	108	—	317	3号横	井戸3－2	土師器皿	△
47	—	218	2号横	南北溝2－8	瓦器椀	△	109	—	316	3号横	井戸3－2	土師器皿	△
48	—	219	2号横	南北溝2－8	瓦器椀	△	110	—	318	3号横	井戸3－2	土師器皿	△
49	—	191	2号横	南北溝2－8	瓦質羽釜	△	111	5	86	3号横	井戸3－2	瓦器皿	○
50	—	223	2号横	南北溝2－8	土師質羽釜	△	112	—	319	3号横	井戸3－2	瓦器皿	△
51	—	222	2号横	南北溝2－8	土師質羽釜	△	113	—	320	3号横	井戸3－2	瓦器皿	△
52	—	221	2号横	南北溝2－8	土師質羽釜	△	114	5	11	3号横	井戸3－2	瓦器皿	○
53	5	33	2号横	土坑2－4	瓦器椀	○	115	5	10	3号横	井戸3－2	瓦器皿	○
54	5	36	2号横	土坑2－4	瓦器椀	○	116	—	324	3号横	井戸3－2	瓦器椀	△
55	5	34	2号横	土坑2－4	瓦器椀	○	117	—	325	3号横	井戸3－2	瓦器椀	△
56	5	28	2号横	土坑2－4	瓦器椀	○	118	—	321	3号横	井戸3－2	瓦器椀	△
57	5	32	2号横	土坑2－4	瓦器椀	○	119	—	323	3号横	井戸3－2	瓦器椀	△
58	5	93	2号横	土坑2－4	瓦器椀	○	120	5	1	3号横	井戸3－2	瓦器椀	○
59	5	35	2号横	土坑2－4	瓦器椀	○	121	5	73	3号横	井戸3－2	瓦器椀	○
60	5	29	2号横	土坑2－4	瓦器椀	○	122	—	322	3号横	井戸3－2	瓦器椀	△
61	5	96	2号横	土坑2－4	瓦器椀	○	123	6	83	3号横	井戸3－1	瓦器椀	○
62	5	95	2号横	土坑2－4	瓦器椀	○	124	6	82	3号横	井戸3－1	瓦器椀	○

実測遺物登録対照表（1）

挿図番号	図版番号	実測番号	地区	遺構番号	器種	残存
125	6	3	3号棟	井戸3−1	瓦器椀	○
126	6	79	3号棟	井戸3−1	瓦器椀	○
127	6	78	3号棟	井戸3−1	瓦器椀	○
128	6	40	3号棟	井戸3−1	瓦器椀	○
129	6	49	3号棟	井戸3−1	瓦器椀	○
130	6	43	3号棟	井戸3−1	瓦器椀	○
131	6	42	3号棟	井戸3−1	瓦器椀	○
132	−	46	3号棟	井戸3−1	瓦器椀	○
133	6	7	3号棟	井戸3−1	瓦器椀	○
134	−	283	3号棟	井戸3−1	瓦質鉢付羽釜	△
135	−	142	3号棟	井戸3−1	瓦器皿	○
136	6	6	3号棟	井戸3−1	瓦器皿	◎
137	6	143	3号棟	井戸3−1	瓦器皿	○
138	−	131	3号棟	南北溝3−1	瓦器皿	△
139	6	145	3号棟	井戸3−1	瓦器皿	○
140	−	101	3号棟	南北溝3−1	瓦器皿	△
141	6	144	3号棟	井戸3−1	瓦器皿	○
142	−	128	3号棟	南北溝3−1	瓦器台付皿	△
143	−	118	3号棟	南北溝3−1	瓦器椀	△
144	−	123	3号棟	南北溝3−1	瓦器椀	△
145	6	12	3号棟	南北溝3−1	瓦器椀	○
146	−	127	3号棟	南北溝3−1	瓦器椀	△
147	−	109	3号棟	南北溝3−1	瓦器椀	△
148	−	124	3号棟	南北溝3−1	瓦器椀	△
149	−	121	3号棟	南北溝3−1	瓦器椀	△
150	−	129	3号棟	南北溝3−1	瓦器椀	△
151	−	100	3号棟	南北溝3−1	瓦器鉢	△
152	−	17	3号棟	南北溝3−1	土師器皿	△
153	6	63	3号棟	井戸3−1	土師器皿	○
154	6	136	3号棟	井戸3−1	土師器皿	○
155	6	5	3号棟	井戸3−1	土師器皿	○
156	−	135	3号棟	井戸3−1	土師器皿	△
157	6	134	3号棟	井戸3−1	土師器皿	○
158	6	138	3号棟	井戸3−1	土師器皿	◎
159	6	137	3号棟	井戸3−1	土師器皿	○
160	−	62	3号棟	井戸3−1	土師器皿	△
161	−	115	3号棟	南北溝3−1	土師器皿	△
162	−	107	3号棟	南北溝3−1	土師器皿	△
163	6	58	3号棟	井戸3−1	土師器皿	○
164	6	18	3号棟	南北溝3−1	土師器皿	◎
165	−	114	3号棟	南北溝3−1	土師器皿	△
166	−	60	3号棟	井戸3−1	土師器皿	△
167	6	57	3号棟	井戸3−1	土師器皿	○
168	−	106	3号棟	南北溝3−1	土師器皿	△
169	−	141	3号棟	井戸3−1	土師器皿	△
170	6	61	3号棟	井戸3−1	土師器皿	○
171	−	105	3号棟	南北溝3−1	土師器皿	△
172	−	112	3号棟	南北溝3−1	土師器皿	△
173	−	113	3号棟	南北溝3−1	土師器皿	△
174	−	59	3号棟	井戸3−1	土師器皿	○
175	−	117	3号棟	南北溝3−1	土師器皿	△
176	−	84	3号棟	灰白土層	土師器皿	△
177	−	13	3号棟	南北溝3−1	土師器皿	△
178	−	116	3号棟	南北溝3−1	土師器皿	△
179	6	139	3号棟	井戸3−1	土師器皿	○
180	−	111	3号棟	南北溝3−1	土師器皿	△
181	−	343	3号棟	南北溝3−1	東播系すり鉢	△
182	−	172	3号棟	南北溝3−1	東播系すり鉢	△
183	−	171	3号棟	南北溝3−1	東播系すり鉢	△
184	−	186	3号棟	南北溝3−1	東播系すり鉢	△
185	−	336	3号棟	井戸3−1	土師質羽釜	●
186	−	282	3号棟	南北溝3−1	土師質羽釜	△
187	−	335	3号棟	井戸3−1	土師質羽釜	△
188	−	334	3号棟	井戸3−1	土師質羽釜	△
189	5	88	東設備棟	落ち込み東設−2	土師器皿	○
190	−	333	東設備棟	落ち込み東設−2	土師器皿	△
191	5	90	東設備棟	落ち込み東設−2	土師器皿	△
192	−	313	東設備棟	落ち込み東設−2	丸器皿	△
193	5	89	東設備棟	落ち込み東設−2	丸器皿	○
194	5	92	東設備棟	落ち込み東設−2	丸器椀	○
195	5	91	東設備棟	落ち込み東設−2	丸器椀	○
196	−	310	東設備棟	落ち込み東設−2	土師質羽釜	△
197	−	161	3号棟	灰白土層	中国製白磁皿	△
198	−	159	3号棟	井戸3−1	中国製白磁皿	△
199	−	158	3号棟	井戸3−1	中国製白磁皿	△
200	−	157	4区	東西溝4−3	中国製白磁皿	△
201	−	162	西遺跡	穴西遺−1	中国製白磁皿	△
202	−	160	東設備棟	灰白土層	中国製白磁皿	△
203	−	151	3号棟	灰白土層	中国製白磁皿	△
204	−	156	東設備棟	灰白土層	中国製白磁皿	△
205	−	152	3号棟	南北溝3−1	中国製白磁皿	△
206	−	154	1号棟	東西溝1−5	中国製白磁皿	△
207	−	173	4区	東西溝4−2	中国製白磁皿	△
208	−	337	3号棟	南北溝3−1	中国製白磁皿	△
209	−	155	2号棟	灰白土層	中国製白磁皿	△
210	−	212	北道路	灰白土層	中国製青磁皿	△
211	−	166	3号棟	灰白土層	中国製青磁皿	△
212	−	164	北道路	灰白土層	中国製青磁皿	△
213	−	163	3号棟	灰白土層	中国製青磁皿	△
214	表紙	4	3号棟	井戸3−1	中国製青磁皿	△
215	−	165	3号棟	灰白土層	中国製青磁皿	△
216	−	200	2号棟	柱穴2−2−10	中国製青磁皿	△
217	−	189	2号棟	南北溝2−5	中国製青磁皿	△
218	−	167	3号棟	灰白土層	中国製青磁皿	△
219	−	170	3号棟	南北溝3−1	常滑焼大甕	△
220	−	169	3号棟	灰白土層	常滑焼大甕	△
221	−	196	2号棟	大土坑2−1	丸瓦	△
222	−	199	2号棟	黒褐土層	丸瓦	△
223	−	285	2号棟	大土坑2−1	平瓦	△
224	−	345	2号棟	大土坑2−1	平瓦	△
225	−	269	2号棟	灰白土層	平瓦	△
226	−	286	2号棟	大土坑2−1	平瓦	△
227	−	195	2号棟	黒褐土層	道具瓦	△
228	7	276	3号棟	灰白土層	開元通宝 銭	◎
229	7	278	3号棟	灰白土層	不明銅銭	◎
230	7	150	3号棟	井戸3−2	青銅製品	◎
231	7	264	1号棟	南北溝1−1	青銅製品	◎
232	7	267	3号棟	井戸3−1	釘	△
233	7	266	3号棟	井戸3−1	釘	△
234	7	256	3号棟	灰白土層	釘	△
235	7	257	1号棟	黒褐土層	鏃（？）	△
236	−	288	3号棟	灰白土層	鉄製鍋（？）	△
237	−	258	1号棟	十坑1−30	鉄赤材	◎
238	7	265	3号棟	井戸3−2	石製鍛	◎
239	7	2	3号棟	南北溝3−1	鞴（？）	◎
240	7	341	3号棟	大土坑3−3	鋳型	△
241	7	259	2号棟	井戸3−4	鋳型	△
242	7	260	3号棟	灰白土層	鋳型	△
243	−	340	2号棟	南北溝2−8	フイゴ羽口	△
244	−	339	2号棟	井戸2−1	フイゴ羽口	△
245	−	338	2号棟	南北溝2−7	フイゴ羽口	△
246	−	309	2号棟	井戸2−3	砥器手鍬	△
247	−	308	2号棟	井戸2−3	肥前磁器碗	△
248	−	306	2号棟	井戸2−3	肥前磁器碗	△

ほぼ完形＝◎
右肩完形復元＝○
右肩部分復元＝●
破片＝△

実測遺物登録対照表（2）

報　告　書　抄　録

ふりがな	あまべいせき
書　　名	余部遺跡　Ⅱ
副 書 名	河内鋳物師関連集落の調査
巻　　次	
シリーズ名	大阪府埋蔵文化財調査報告
シリーズ番号	2002－1
編 著 者 名	西川寿勝・渡辺晴香・内田俊秀・甚田真友子
編 集 機 関	大阪府教育委員会
所 在 地	〒540-8571　大阪府大阪市中央区大手前２丁目　TEL　06-6941-0351（代表）
発行年月日	2003年３月31日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所　在　地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯 °′″	東経 °′″	調査期間	調査面積	調査原因
余部遺跡（あまべいせき）	大阪府南河内郡（おおさかふみなみかわちぐん） 美原町北余部80番地他（みはらちょうきたあまべ）	27385	18	34° 32′ 11″	135° 23′ 48″	02年8月から 03年3月末まで	合計 3,300㎡	府営美原北余部住宅建て替えに伴う調査

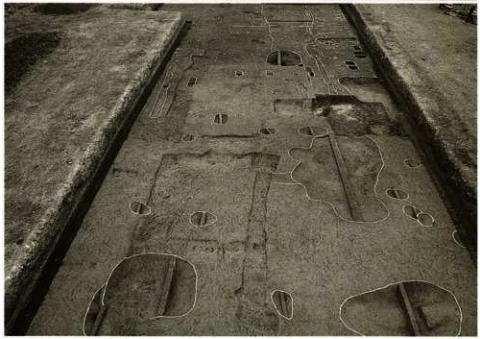
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
余部遺跡	生産遺跡	古墳時代後期	畝溝	須恵器・土師器	
	集落	鎌倉時代	掘立柱建物 区画溝・井戸	土器・瓦・青磁・白磁	方形区画に囲まれた河内鋳物師関連の鋳造工房と居住域
	生産遺跡	鎌倉時代	鋳造工房	鋳型・フイゴ羽口・青銅製品・鉄素材	
		江戸時代	井戸	陶磁器	

図　　版

井戸３－１出土青磁小皿

図版1　1号棟区遺構

a．検出状況（西から）



b．完掘状況（西から）

c．検出状況（西から）

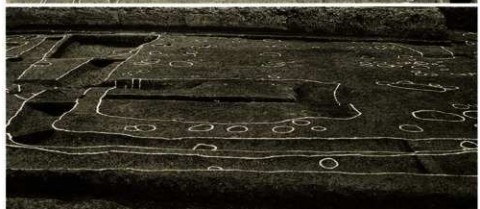
d．完掘状況（西から）

図版２　２号棟区遺構

a．遺構検出状況（西から）

b．完掘状況（西から）

c．掘立柱建物２－１（西から）

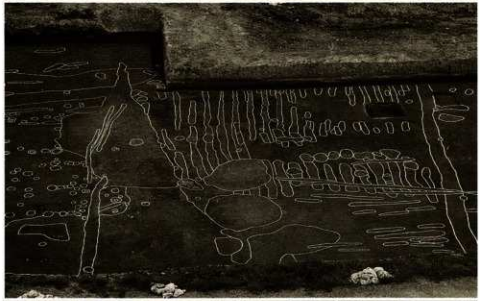


d．同上（南から）

図版３　３号棟区遺構

a．調査区全景（南から）

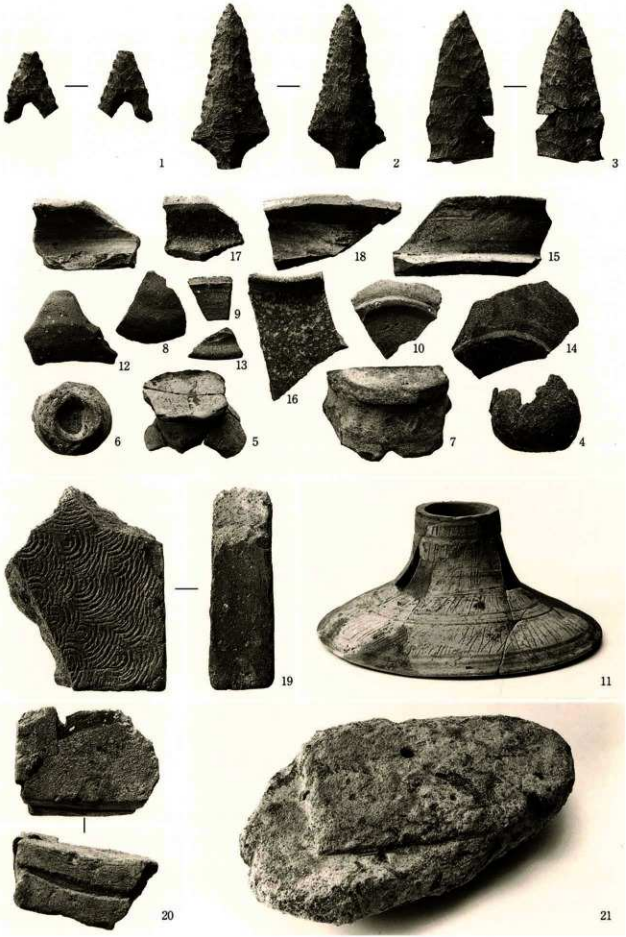
b．同上（南から）



c．畝溝群（南から）

d．調査区全景（東から）

図版4　中世以前の土器・石器・瓦磚類



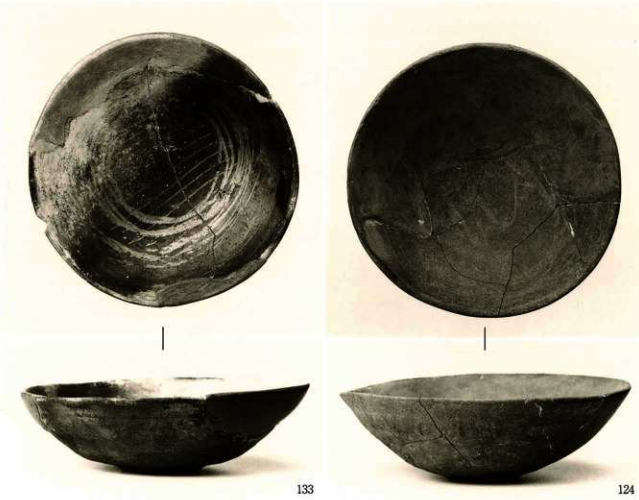
図版5　土坑2－4・井戸3－2・落ち込み東設－2出土土器

土坑2－4出土土器

井戸3－2出土瓦器

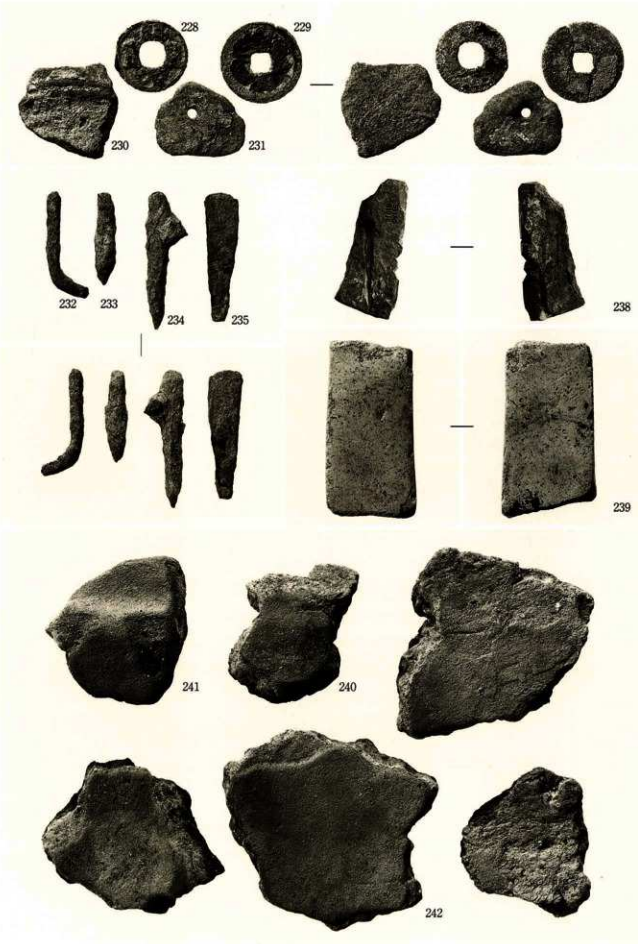
落ち込み東設－2出土土器

井戸3－1出土土器



井戸3－1出土瓦器椀

図版7　青銅製品・鉄製品・石製品・鋳型



大阪府埋蔵文化財調査報告 案内（平成12・13年度）

2000-1　新堂廃寺
2　寛弘寺1号墳
3　池上曽根遺跡Ⅲ
4　野々上西遺跡
5　陶邑窯跡群－谷山池12号窯跡
6　七ノ坪遺跡
7　金岡西遺跡
8　宮野遺跡
9　唐櫃山古墳

2001-1　招提中町遺跡
2　余部遺跡Ⅰ
3　堀遺跡
4　磯之上十ノ坪遺跡
5　岸和田城跡
6　跡部遺跡
7　神田北遺跡
8　讃良郡条里遺跡

2002-1　余部遺跡Ⅱ

大阪府埋蔵文化財調査報告2002－1

余部遺跡 Ⅱ

－河内鋳物師関連集落の調査－

2003年3月31日発行

編集・発行　大阪府教育委員会
〒540-8571
大阪市中央区大手前2丁目
TEL 06-6941-0351（代）

印刷所　株式会社 中島弘文堂印刷所
大阪市東成区深江南2-6-8
TEL 06-6976-8761（代）